

# 第三章



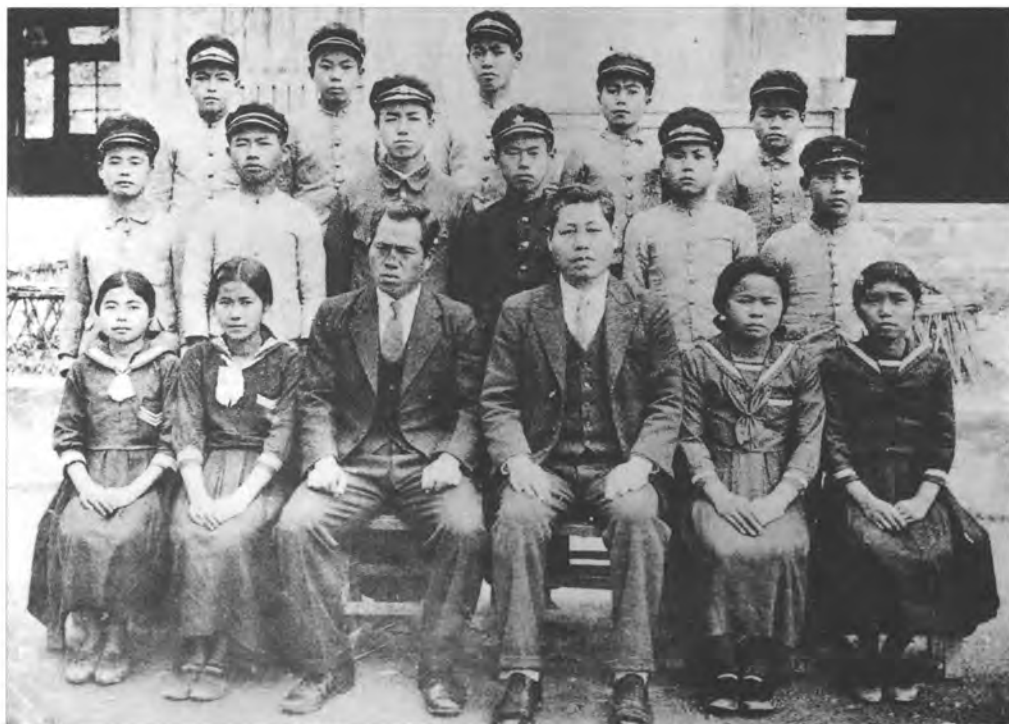
学校遠景。平成3年（1991年）1月（撮影：山城定雄）

# 思い出のアルバム



昭和12年3月 有銘尋常高等小学校の高等1、2年生の卒業記念写真  
(写真提供：具志堅興徳)

一、懐かしき同窓生  
●戦前の卒業生  
大正十三年生まれ



昭和15年3月 高等2年生の卒業記念写真 (写真提供：新崎康守)

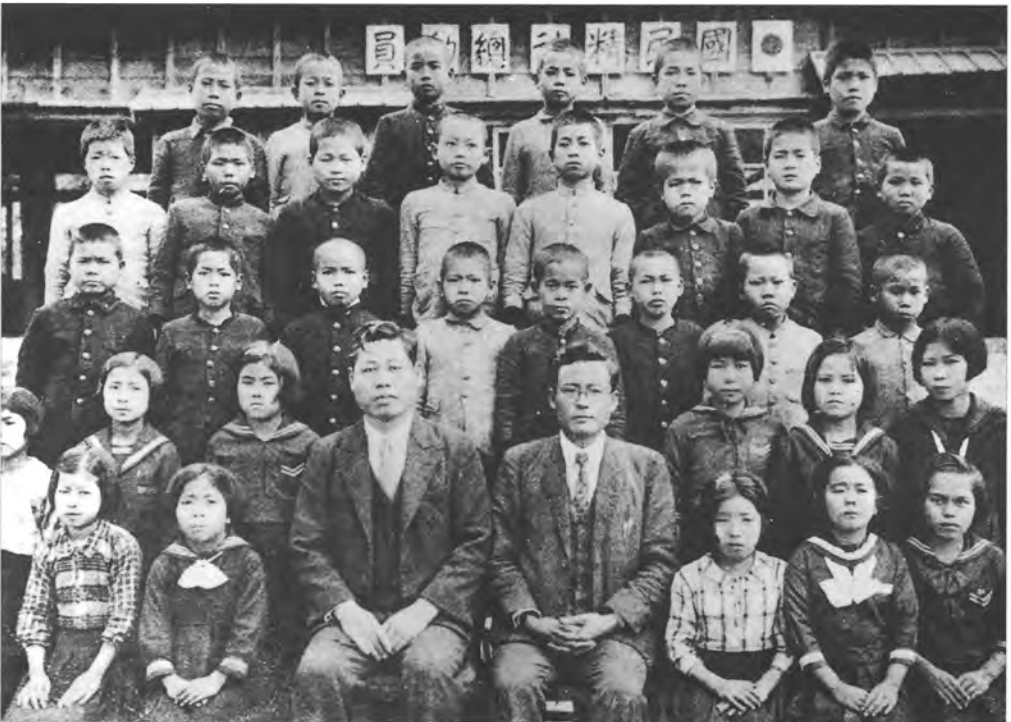
大正十四年生まれ

昭和元年生まれ



デイゴの木の所で卒業記念写真（写真提供：新垣善勇）

昭和二年生まれ



昭和15年3月 当時の6年生の卒業記念写真（写真提供：新崎康守）



昭和六年生まれ

久しぶりに集った同期生（でいご会）昭和53年（1978）11月22日（写真提供：平良幸子）



●戦後の卒業生  
昭和九年生まれ（二期生）

昭和25年（1950）3月 卒業記念（写真提供：佐久本盛明）



昭和十年生まれ（三期生）



創立100周年記念祝賀会で久しぶりに顔を合わせた（写真提供：山城定雄）

昭和十一年生まれ（四期生）



（写真提供：平良晨勇）



昭和十二年生まれ（五期生）

（写真提供：平良晨勇）



昭和十三年生まれ（六期生）

（写真提供：平良晨勇）

昭和十四年生まれ（七期生）

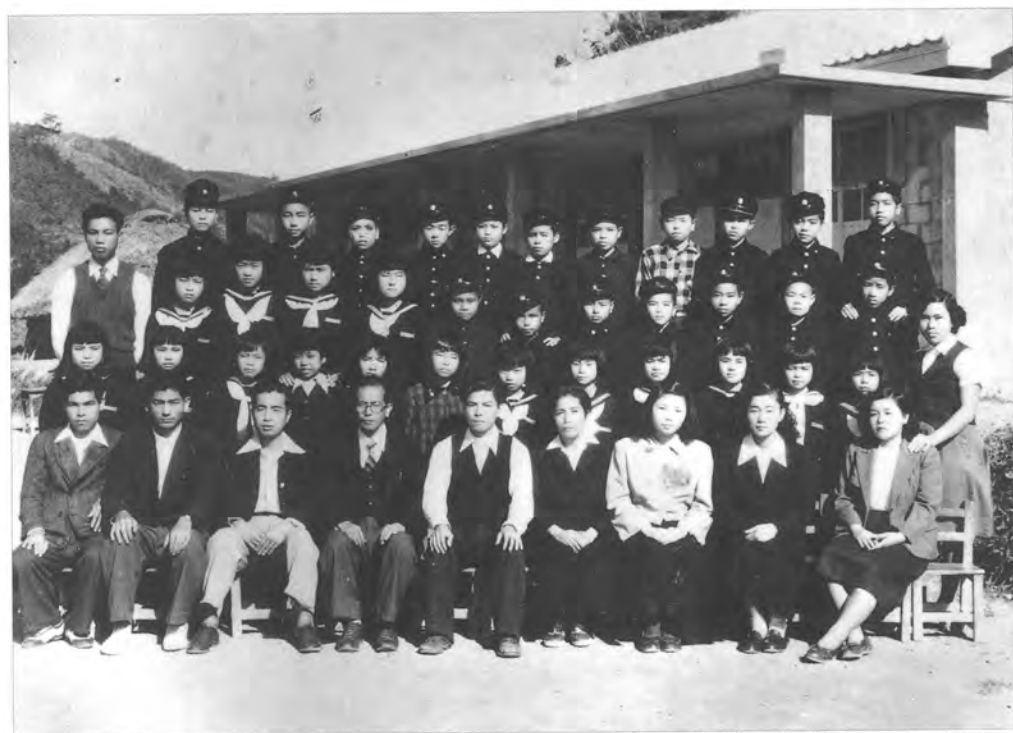


(写真提供：平良晨勇)

昭和十五年生まれ（八期生）



(写真提供：平良晨勇)



昭和十六年生まれ（九期生）

第9期卒業記念 昭和29年（1954）3月（写真提供：平良晨勇）



昭和十七年生まれ（十期生）

第10期卒業記念 昭和30年（1955）3月16日（写真提供：平良晨勇）



第11期卒業記念 昭和31年（1956）3月15日 （写真提供：平良晨勇）

昭和十八年生まれ（十一期生）



第12期卒業記念 昭和32年（1957）（写真提供：翁長ナハ）

昭和十九年生まれ（十二期生）





昭和二十年生まれ（十三期生）

第13期卒業記念 昭和33年（1958）3月 （写真提供：翁長ナヘ）



昭和二十二年生まれ（十四期生）

有銘中学校1年終了記念（学校アルバム）



昭和二年生まれ（十五期生）



第15期卒業記念 昭和35年（1960）3月（写真提供：平良晨勇）

昭和二三年生まれ（十六期生）



第16期卒業記念 昭和36年（1961）3月（写真提供：当山全伸）



昭和二四年生まれ（十七期生）

有銘中学校3年卒業記念 昭和40年（1967）3月（写真提供：翁長ナヘ）



昭和二五年生まれ（十八期生）

第18期卒業記念 昭和38年（1963）3月21日（写真提供：翁長ナヘ）

昭和二六年生まれ（十九期生）



有銘中学校 3年卒業記念 昭和42年（1967）3月（写真提供：平田嗣雄）

昭和二七年生まれ（二十期生）



第20期卒業記念 昭和40年（1965）3月（写真提供：山城定雄）



昭和二八年生まれ（二二期生）

第21期卒業記念 昭和41年（1966）3月 （写真提供：平田嗣雄）



昭和二九年生まれ（二二期生）

有銘中学校3年卒業記念 昭和45年（1970）3月20日 （写真提供：平良晨勇）

昭和三十年生まれ（二三期生）



有銘中学校 3年卒業記念 昭和46年（1971）3月22日 （写真提供：平良晨勇）

昭和三一年生まれ（二四期生）



第24期生卒業記念 昭和44年（1969）3月 （写真提供：翁長ナハ）





昭和三年生まれ（二五期生）

第25期卒業記念 昭和45年（1970）3月20日（写真提供：平良晨勇）



昭和三年生まれ（二六期生）

第26期卒業記念 昭和46年（1971）3月22日（写真提供：平良晨勇）



昭和三四年生まれ（二七期生）



第27期卒業記念（写真提供：平良晨勇）

昭和三五年生まれ（二八期生）



第28期卒業記念 昭和48年（1973）3月23日（写真提供：平良晨勇）



昭和三六年生まれ（二九期生）

第29期卒業記念 昭和49年（1974）3月22日（写真提供：平良晨勇）



昭和三七年生まれ（三十期生）

有銘小学校2年修了記念 昭和46年（1971）3月24日（写真提供：平良幸子）

昭和三八年生まれ（三一期生）



有銘小学校1年修了記念 昭和46年（1971）3月24日（写真提供：翁長ナハ）

昭和三九年生まれ（三二期生）



有銘小学校1年修了記念 昭和47年（1972）3月22日（写真提供：平良幸子）



昭和四十年生まれ（三三期生）

有銘小学校1年修了記念 昭和48年（1973）3月（写真提供：平良幸子）



昭和四一年生まれ（三四期生）

有銘中学校3年卒業記念 昭和57年（1982）3月24日（写真提供：平田尚樹）

昭和四二年生まれ（三五期生）



有銘幼稚園卒園記念 昭和49年（1974）3月（写真提供：平良晨勇）



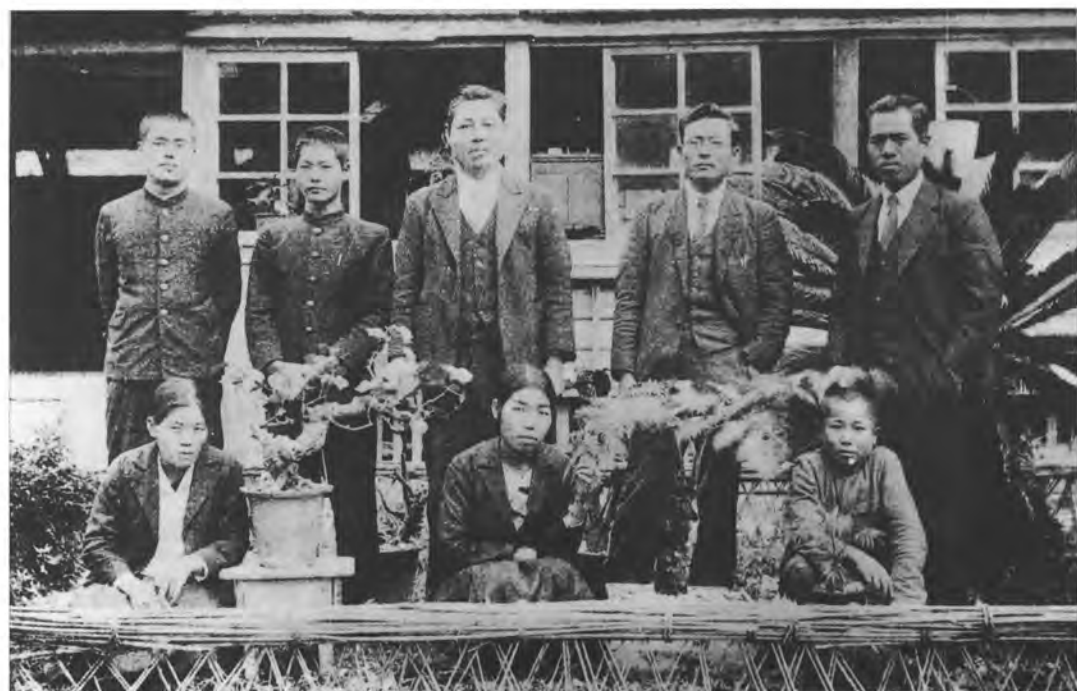
二、我が母校の思い出



思い出多いデイゴの木の下で記念撮影  
昭和15年卒業の高等2年生達  
(写真提供：新崎康守)



謝花トヨ先生と子供達（昭和8年正月）  
(写真提供：新垣善勇)



昭和15年当時の教職員（写真提供：新崎康守）





昭和15年生の女生徒たち（昭和27年頃）  
（写真提供：平良晨勇）



ウガンの大ガジュマルをバックに記念撮影  
昭和15年6年度卒業生の皆さん  
（写真提供：新崎康守）



昭和12年生の小学校卒業記念撮影（写真提供：島袋徳盛）



昭和14年生校舎をバックに記念スナップ  
昭和28年頃 (写真提供：平良農勇)



ガジュマルをバック記念撮影  
(昭和14年生、中学3年生当時)  
(写真提供：平良農勇)



勤労で田んぼをたがやす生徒たち (昭和14年生)  
(写真提供：平良農勇)



勤労農作業を終えて（昭和28年頃）（写真提供：平良農勇）



親川政子さん（当時3、4年生）と学校教職員（昭和2年頃）（写真提供：平良農勇）



野外での学芸会 昭和28年頃（写真提供：平良農勇）



昭和30年頃、カヤブキ教室をバックに撮影  
(写真提供：平良晨勇)



昭和28年頃の教職員 (写真提供：平良晨勇)



昭和15年生 記念撮影 (写真提供：平良晨勇)



昭和30年頃 大城博先生と8期生の女子生徒の皆さん（写真提供：平良晨勇）



陸上競技大会へ出場した選手  
（写真提供：平良晨勇）



昭和30年頃、学芸会（8期生）  
（写真提供：平良晨勇）



60周年記念図書館前で記念撮影（写真提供：島袋徳盛）



農作業風景、田んぼの中で記念スナップ  
（写真提供：平良農勇）



中学女子バレー部員（10期生）  
（写真提供：平良農勇）





創立70周年で記念撮影をする職員とPTA役員（写真提供：翁長ナハ）



70周年記念で寄贈されたピアノ（70周年記念誌より）



70周年記念式典の風景（70周年記念誌より）



創立70周年記念パレード（70周年記念誌より）



創立70周年式典で経過報告する玉城武三教頭  
（70周年記念誌より）



とび入りで三味線をひく  
崎山喜順さん  
（70周年記念誌より）



昭和41年頃の職員（写真提供：平良農勇）



辺土名地区大会への推戴式風景（写真提供：平良農勇）



学芸会記念スナップ（14期生）（写真提供：平良幸子）



1969年職員の視察研修（古宇利島へ）（写真提供：平良晨勇）



昭和30年頃 晨勇先生と記念撮影（8期生）（写真提供：平良晨勇）



昭和30年頃の運動会（写真提供：平良晨勇）



昭和34年頃の8期生の皆さん（写真提供：平良農勇）



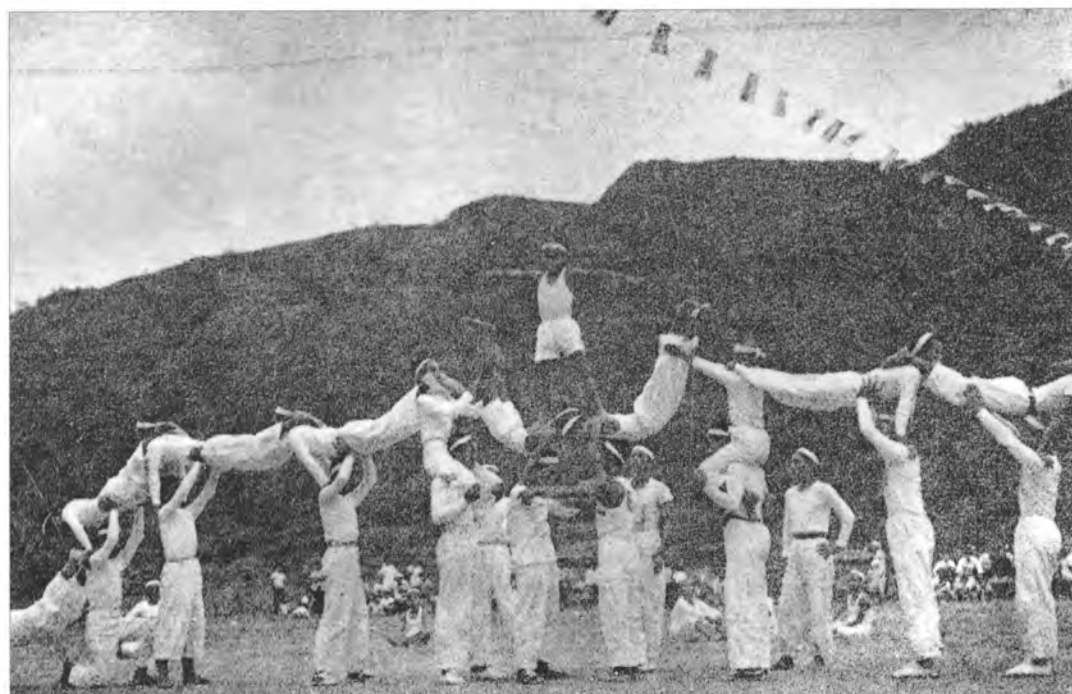
昭和35年頃 職員研修会（高江～安波へ）（写真提供：翁長ナヘ）



昭和35年頃 職員研修会（国頭茅打パンタ）（写真提供：翁長ナヘ）



昭和34年（1959）パレード 生徒は全員、はだしである（1960年学校アルバム）



昭和34年（1959）の運動会（1959年学校アルバム）





昭和三八年頃（16期生）

（写真提供：当山全伸）



昭和38年頃（16期生）田んぼで記念スナップ（写真提供：当山全伸）



昭和40年頃、知花ひとみさん（27期生）（写真提供：平良晨勇）



昭和38年頃の秋季運動会（16期生）（写真提供：当山全伸）



昭和38年頃 運動会を終え同級生、担任と記念撮影（写真提供：当山全伸）



昭和37年頃 給食 調理実習？（16期生）（写真提供：当山全伸）



有銘橋にて（10期生）（写真提供：平良農勇）



学芸会を終えて記念撮影（17期生）（写真提供：平良農勇）



昭和37年頃 先生方と女子生徒（17期生）記念撮影（写真提供：平田嗣雄）



昭和41年頃 運動会（19期生）（写真提供：平田嗣雄）



昭和42年頃 運動会器械体操（19期生）（写真提供：平田嗣雄）



昭和42年 修学旅行（19期生）（写真提供：平田嗣雄）



昭和39年頃 石川元清先生と写真撮影する男子生徒（写真提供：平田嗣雄）



昭和40年頃 辺土名地区バレーボール大会？（写真提供：平田嗣雄）



一年生の理科の授業（27期生）（写真提供：翁長ナヘ）



学芸会を終え平良幸子先生と記念撮影（27期生）（写真提供：平良晨勇）



卒業記念写真を担任の玉城先生と！  
（27期生）（写真提供：平良晨勇）



昭和43年頃 翁長ナハ先生と（29期生）  
（写真提供：翁長ナハ）



# 第五章



山城利正先生の習字指導 平成6年(1994)7月(撮影：山城定雄)

児童・生徒の  
百周年記念作品

一、 図画・版画  
(1) 小学校の出品作品



幼稚園 みやぎ あい



幼稚園 まえかわ たかし



幼稚園 いなふく たくま



幼稚園 なかそね しげきよ



幼稚園 ひらた だいち



幼稚園 つは まなか



幼稚園 おくま ともやす



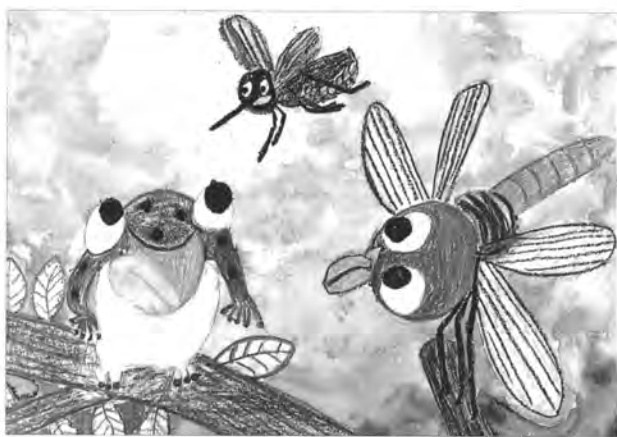
「玉入れ」  
1年 おおむら せいや



「やさしいくま」  
2年 稲福 悟史



「おいしいごはんのあとかたづけ」  
1年 たまなは りょう



「にげろ やぶか」  
2年 仲宗根 千代美



「海水浴」  
3年 玉那覇 駿



「歯をきれいに」  
2年 金城良英



「ゆめをにるなべ」  
3年 上 岡 利 沙

「母さんの作ったジャム」  
3年 仲宗根 繁 実





「文をかく母さん」  
4年 宮城 達也



「新聞配達」  
4年 石川 藍



「おわんあらいをする母さん」  
4年 仲宗根 梨乃



「本を読もうかしら？」  
4年 仲宗根 繁力





「しよっきあらい」  
4年 津波 杏里



「しよっきあらい」  
4年 港川 寛



「りょうり」  
4年 平田 潤也



「皿あらい」  
4年 金城 みゆき



「きゅうりを切る母」  
4年 島袋 真由美



「あいろんをかける母」  
4年 知念 伊久美



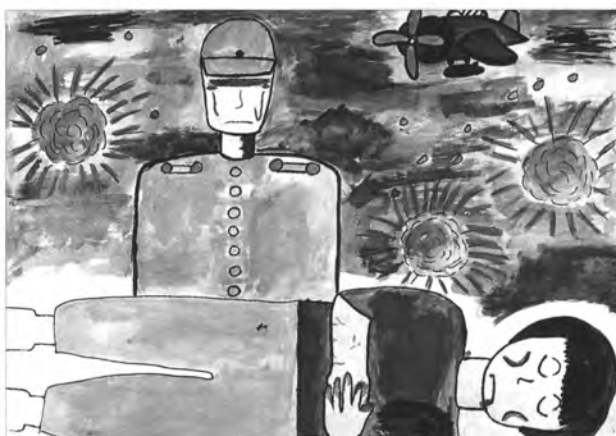
「おわん洗する母」  
4年 知花 あかね



「せんたくする母」  
4年 仲村 由貴子



「25m泳いだとき」  
3年 花城 裕介



「悲しみ」  
5年 宮里 あゆみ



「祈り」  
5年 奥間 清香



「比地大滝」  
5年 大城 翼



「戦争とホタル」  
5年 根路銘 工リ



「シーサー」  
5年 平田 嗣郎



「海」  
5年 田中 通貴



「つり」  
5年 知念 卓正



「本を読んでるわたし」  
1年 みやぎ ゆか



「はねつきしよう」  
1年 ひが しんのすけ



「マラソン」  
2年 仲村 拓也



「たこあげ」  
1年 うえま えみ





「うさぎと遊んだよ」  
2年 稲 福 舞



「サッカー」  
3年 根路銘 国 哉



「とび箱」  
3年 比 嘉 エリカ

(2)  
中学校の出品作品



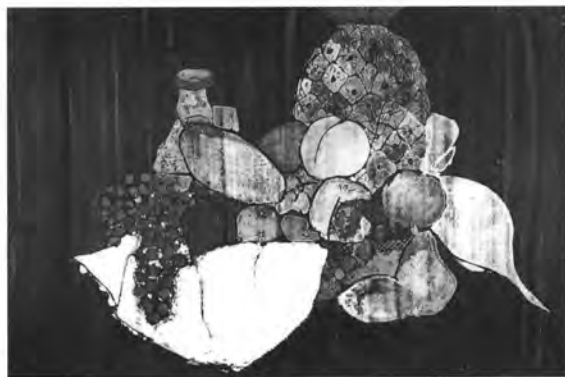
1年 宮城 哲也



1年 仲宗根 幸恵



1年 仲嶺 奈月



2年 仲嶺 静香



1年 当山 望美



1年 仲宗根 繁博



1年 宮城 哲也



2年 比嘉 弘樹



2年 平田 一真



2年 仲 嶺 静 香



2年 島 袋 翼



2年 前 川 翼



2年 宮 里 亜 沙 子



2年 港 川 正 樹



3年 又吉朝絵



3年 仲宗根 幸



3年 田場純子



2年 田中 極斗



2年 比嘉 弘樹



2年 平田 一真



2年 島袋 翼



2年 港川 正樹



2年 仲宗根 繁博



2年 宮里 亜沙子



2年 仲嶺 静香



2年 前川 翼



左から、仲嶺奈月、宮城哲也、仲宗根恵、当山望美さんの作品



二、習字・書道

(1) 小学校の出品作品



3年 大城隼人



3年 仲宗根 東



3年 大村 勇也



3年 又吉 拓之

小  
七  
い  
花

三年  
比嘉  
ちとせ

3年 比 嘉 ちとせ

平  
和  
の  
光

三年  
宮城  
大輝

3年 宮 城 大 輝

明  
け  
の  
空

三年  
仲嶺  
真道

3年 仲 嶺 真 道

苗  
夕

六年  
宮城  
ひかる

5年 宮 城 ひかる

熱  
意

六年  
平田  
嗣実

5年 平 田 嗣 実

探  
険

六年  
比嘉  
勇太

5年 比 嘉 勇太

(2) 中学校の出品作品

万物生光輝  
二年 港川 正樹

2年 港川 正樹

明日への展望  
一年 仲嶺 奈月

1年 仲嶺 奈月

江山万古清  
二年 平田 一真

2年 平田 一真

松風生夜涼  
二年 仲嶺 静香

2年 仲嶺 静香



2年 宮 里 亜沙子



2年 仲 嶺 静 香



2年 比 嘉 弘 樹



2年 田 中 極 斗



## サッカーしたよ

一年 ぐしけん きょうた

金ようびの三こうじに、二ねんせいとサッカーのしあいをしました。

はじめにせんせいがルールのせつめいをしました。

つぎにAチームとBチームがたいせんをしました。

おんがくもながれてしあいがたのしかったです。

## じいちゃんのでつだい

二年 平良 晨 弥

「しんや、きょうは木のえだうちしような。」

とばあちゃんが言いました。ぼくが、

「えだうちってなんねえ。」

ときくと、

「のびすぎたえだを、切ることだよ。」

と言ったので、ぼくは はじめてわかりました。ぼくは、早くやりたくまりました。

はじめに、じいちゃんが、長いひもに、てつパイプの切れはしを、くくりつけました。じいちゃんの家のにわにトックリキワタのえだが、電線にひっかかるほどのびています。じいちゃんがひもをなげて大きい枝に、パイプをひっかけたらブランコのようにになりました。ぼくはぶらさがってこぎました。えだがおれないかなあとしんぱいでしたが、たのしかったです。

つぎは、じいちゃんが、はしごと、たか切りのこぎりをもつてきました。ぼくは、ブランコのひもをひっぱって、じいちゃんが、はしごにのぼりました。木を切る時ゴシゴシ音がして、木のくずがおちてきました。しばらくすると、木のえだが、

「ギギー、ドゥスーン。」と、大きな音をたてておちてきました。かわった音がして、はっぱがザワザワしていました。じいちゃんが、

「しんや、のこぎりでえだをみんな切ってちょうだい。」と、言いました。ぼくは、早く切ってみたいなあと思



いました。はじめに小さいえだを左手でつかんで、右手でのこぎりをひきました。シコシコおとがしてきれました。だんだんおもしろくなってきました。大きいえだを切るときは、なかなかうまく切れません。じいちゃんが

「のこを木がかんでいるんだよ。」

と言って、えだをもちあげてくれました。すると、よく切れました。だんだんこしがいたくなりしましたが、がまんして切ったので、やつときれました。ぼくは、ほつとしました。ばあちゃんが、

「力もちだから、切りじょうずだね。」

と、いったので、うれしくなりました。切ったえだをはこんでならべました。

「つかれたでしょ。」

と言ってアイスキャンデーをくれました。つめたくて、とてもおいしかったです。

「しんや、手つだいじょうずだね。」

とじいちゃんがほめてくれたのでとてもうれしかったです。木のえだうちは、はじめてだったけど、うまくできました。また、やりたいなと思いました。たのし

い手つだいでした。

## バスケットくんへ

二年 大城 司

バスケットくんは、ぼくとおなじところがあるね。ぼくもときどきおいしいれに入ることがあるんだけど長い間おしいれの中にいるとあくびは出るしつままないよね。バスケットくんはおしいれの中はずっといたら、つかわれていたことを思い出すんだよね。それにいっしょにいたくまさんも思いたすね。くまさんはいいね。まい日みこちゃんといっしょに学校にいつてね。バスケットくんもつれていけばいいのにな。

あきからふゆになつたらバスケットくんはさむくなるね。おべんとさんははんかちがあるからいいよね。バスケットくんもおべんとうみたいになにかにつつまれていたら、冬になつてもあたたかいのにな。

バスケットくんはいえでしてよかつたと思うよ。ぼ

くはともだちがいてまい日たのしいんだよ。おしいれの中にとともだちができないものね。

みこちゃんのおかあさんがそうじしているすきに、おしいれからにげたよね。そのとき、ぼくはドキドキしたよ。「バスケットくん、いそいで、いそいで。」つて心の中で思ったよ。

わるいカラスがノネズミくんをおいかけてきたとき、口をしめて、カラスの首をつかまえたよね。カラスが言った、「たしけてふれえ。」は、たのしかったね。カラスがにげていったときは心がスカってしたよ。

バスケットくんとともだちになりたいな。と思ったよ。バスケットくんはたのしいしゆうきもあるし、つよいからね。バスケットくん、きみのおなかはせまいけど、ぼくがはいってもだいじょうぶだよね。でも、バスケットくんにはともだちができたんだよね。ぼくうれしいな。しかも、一ぴきではなくてノネズミくんのおくさんもいっしょだよ。赤ちゃんがうまれたらもつともつたのしくなるだろうね。よかったね。

## 百周年記念日

三年 宮城 祐二

さいしょのパレードでげさしでしました。バスにのつていき、げさしのはしからたくゆきくんのおうちぐらいのほうまでいきました。そしてバスにのつてあるめにいきました。あるめでもこうしんしました。

とてもあつかったです。テープカットをしてふうせんをとばして、こうていのほうをこうしんしてこうていのほうにいきました。

じよまくしきがありました。

じよまくしきがおわつて。たいいくかんに5ふんごにしゆうごうつてしゆうじのせんせいがいいました。たいくかんにいってさいしょあいさつがありました。

つかれてたのでねむたくなりました。

そしてはなしをしていたひとがかわっていました。

それでそのひとがおておっていました。

## ネーブルカデナにいったこと

三年 奥 間 朝 浩

ネーブルカデナにいきました。まずおもちゃをえらびました。

いろんなおもちゃがありました。さいしよにマクドナルドのおかしをつくるものをかおうとしました。でもほかのものにかえました。

ゲームのところやおかしのところにいきました。

弟と同じふくろのおもちゃをおとうさんが「これにしたら」といったのでおなじものになりました。

おもちゃを買っておかあさんとパッチワークのみせでまちあわせをしました。おかあさんが「もうかえろう」といったので家にかえるために車に乗りました。

とちゅうでコンビニにいきました。おかしをかおうとして「これかって」といったけど弟が「これがいいこれがいい」といったけどけつきよくぼくのえらんだものをかってもらいました。そして家にかえりました。

## 三年生をふりかえって

三年 古 堅 香 織

私は、この一年間をふりかえってみると、いろいろな事がありました。

その中で、一番心にのこった事が四つあります。まず一番目は秋の大運動会かんかんりで暑い日も風ふいて寒い日もみんないっしょうけんめい練習し本番は思ったよりうまくできたのでうれしかったです。

二番目は、百周年記念式でした。エイサーやうた、しゅくがパレードなどいろいろなことができました。

三番目は六年生を送る会でした。

出し物やおどり45分ほつかごを使っていっしょうけんめいれんしゅうをしました。

四番目は、部活で六年生とのお別れしあいでした。

パーベキューやおわりの言ば、楽しい思い出としていてほしいです。

とても楽しい一年間でした。

## 女子Bチームのしあい

三年 前川 ひろの

私はぎのぎの体育館にお母さんの乗用車に乗って行きました。行く前は、道にまよわなかったけど、と申から道が、わかれてました。それでお母さんが、お店の人に聞きました。それでやつと道がわかったとここで、やつとぎのぎの体育館につきました。わたしは、じかんぎりぎりですくかなと思いました。ついた時間は開会式のはじまる前でした。

開会式が終わってたかお先生が、「ちょっとしあいを見てから九時半に金武小学校に行こうね。」と、言いました。わたしは、九時半になる前に車の中で、朝ごはんのおにぎりを食べました。

女子Bチームの服そうは、むらさき色の半ズボンに、洋服は、むらさきです。中からなにもつけません。

九時半になって学校車に乗って、金武小学校に行きました。学校車の中でかおりさんが、「そういえばき

ゆうきゆう箱もった。」と言いました。するとなつ子先生が、「えっ、知らないよ。」と言いました。そして、ちとせさんが、「えー、だれかが、けがしたらどうする。」と言いました。

そして、かおりさんがまた、「もういいよ東とか、ほかの学校からかりれば、いいよ。」と言いました。

それから金武の小学校についてから、金武の体育館の上の練習するところがかべにボールをぶつけて次の人がそのさいしよなげたボールをとるものです。

それでさいこう70回できました。

そして、しあいが始まりました。わたしは三セットに出ました。三セットが始まって。わたしは、金武小の6年生ぐらいのせい高の5番をマークしました。足が速くて、追いつけませんでしたが、マークは、できませんでした。

32対2でまきました。それでもいいしあいになりました。それに、練習にもなりました。わたしは、また金武小としあいをしたいなと思いました。負けてもくやしくありませんでした。

それに、帰りおうえんにきてくれたお母さんとたか

土が有名だと言われているわき水の出るところにつれていってくれました。このわき水は、昔、人がよごさずにきれいなままで、りよう理やおふろに入る時に使ったりしてたけど、水がきれいになく流れつづけたそうです。

だから有名だそうです。それに、とても楽しかったです。

## さし木

三年 山城 穂 高

「おうい、土をとりに行くぞ。」

お父さんは、長いズボンを着てぼくは、いとこからのおさがりの長ズボンを着て、ナカユクイの土がたくさんある所に出発しました。

そこは、三、四回行っているのなれていました。

ナカユクイの土がたくさんある所の近くに車をとめておりました。

うしろのドアをあけてスコップやはちをおろしてさつそく土をはちに入れました。

「同じ所の土を何回もはちに入れると、あまりいい土が取れないぞ。」とききあきた言葉を行いました。

場所をうつしたりしてたいへんだったけど、やつとの思いで、全部のはちに土を入れました。

土を入れたはちとスコップを車に乗せ土を入れたはちをもつてかえるとちょうど十二時だったので昼ごはんにしました。スープとやきそばを食べました。

休むひまなく切っておいた木をはちに植えました。けど昼ごはんのあとは、暑かったけどあせをふきながらもやつと、土を入れたはちに切りとつていた木をぜんぶうえました。家のうしろに、木を植えたはちをおいて水をかけました。

なんか植えた木がニコニコしていて、ありがたうといっているみたいでした。

お父さんが「よくがんばったね。」と言ってジュースを買って、二人だけで庭でジュースを飲みました。

お父さんは、ビールを飲みながら木を植えたはちをながめていました。

## (2) 中学校の部

### 私を支えてくれた言葉

一年 仲嶺 奈月

試合開始のベルの音が、体育館中に鳴り響いている。ハンドボール大会第4試合が始まり、私たちは急いで守りについた。相手チームは勢いよく攻撃し、シュートがものすごくよく決まる。それに比べて、私たちのチームはミスが多い。パミス、キャッチミス、シュートミス。後半戦になった。5対6で私たちが負けている、気がつくと残り時間わずか数秒。ボールを持っていた私は、ゴールに向かつて思いっきりシュートを打った。「入れ。」心の中で叫んだ。だが、そのシュートは、ゴールキーパーの真正面で止められてしまった。と、その瞬間、「ピーピー。」と試合終了のベルが鳴り渡った。私達は、負けてしまったのだ。

翌日、学校へ行くと皆の様子が変わったことに気がついた。教室内で、友達が

私に一言も話してくれないのだ。放課後の部活動でも様子がおかしい。練習ゲームでも全然パスを送ってくれず、二分のゲームでついに一度もボールにさわれなかった。その後も私に対する無視が続いた。とてもつらかったが、自分がミスしたために負けたのだから仕方ないと自分を慰めていた。しかし、ハンドボールの練習でパスが送られてこないのはいやだった。

家でそのこと親に話した。すると父はこう言った。

「努力すれば、必ず皆が自分の所に集まってくるから、がんばってやりなさい。」私の心に「努力」という言葉が響いた。心の底から「勇氣」がわいてくる気がした。

学校で孤独だった。しかし、たった一人の友人だけが、無視されている私に気づきいろいろ話かけてくれた。無視されても我慢しようと思っていたが、彼女の優しさはとてもうれしかった。

それから、私はその友人と二人で毎日のように早朝練習をするようになった。

私は朝起きがとて苦手だったが、その度に「努力」という言葉が頭の中によみがえる。「絶対、皆と試合に勝ち優勝したい。」と、私は心の中で自分に言い聞かせるように練習を始めた。シュートも5本の内、4本と入る確立が多くなってきた。

次の大会が近づいて来た。練習にも力が入る。私と友人は、大会の日が待ち遠しかった。

いよいよ大会当日。初戦突破し順調に勝ち進みいよいよ決勝戦。「前みたいな失敗は絶対しない。だって一生懸命努力してきたんだから」と私の中でそう自分に言いかけ試合に挑んだ。

「ピーピー。」試合開始のベルの音。いつものベルの音とはちがった響きが私に緊張を与える。私たちチームの攻撃。前とちがってミスが全然なくスムーズにパスが通った。私は、相手を引きつけキヤプテンにパスを送った。そのパスをキヤプテンが、ロングシュートに持ち込み、みごとに先手点を取った。その後、シューゲームで前半が終了した。得点は、



5対5で同点だ。

ハーフタイム。今まで無視していたチームメイトから、私に話しかけてくるようになった。私は、とてもうれしく今まで灰色のような心がしだいに晴れ上がった。

後半戦、相手チームのパスミスをやチャブテンが取ると、速攻に走っている私にパスを送った。私は、ボールをキャッチするとジャンプシュートを打った。ボールは、床にバウンドしてキーパーの股を通りぬけゴールの中に入った。私のシュートが決まった。「ないしゅー」と応援団からの声が聞こえてくる。すぐうれしかった。その後も点の取り合いがくり返された。

「ピーピー。」後半終了の合図が鳴った。急いで得点板を見る。12対11。何と1点差で勝っている。チームメイトが私の所に集まってきて握手を求めてきた。私はうれし涙があふれそうになっていた。チームメイトの一人が、「おまえ、いつの間にシュートが入るようになったんだ。優勝だよ。」そう言つて私の肩に

だきついてきた。その時、私は、自分を支えてくれた「努力」という言葉が、いっそう好きになった。

それを機に今までの無視がなくなつた。チームメイトから話かけられたり、練習時のパスが多く回つてくようになった。

私は「もう二度と友達を失いたくない。」と心の奥に今までの苦しみをしまつた。

このでき事を通し、私は成長したと思う。父の言葉「努力」を支えに、努力する大切さを身をもって経験した。「努力」の言葉があつたからこそ孤立の苦しみをのり越えることができた。友達の大切さ、本当の優しさも知る事ができた。

「努力。」これからも忘れない。

## 百周年

一年 宮城 哲也

ついに僕たちの学校も百歳をむかえました。今日は、その晴れの日です。この

有銘校を卒業して行った大勢の人たちが有銘校に集まりみんなで祝う日です。

僕たちもこの日のために吹奏楽や出し物を一生懸命練習してきました。

そして本番、僕の胸はドキドキと鳴り響きとても緊張していました。

「ピーピーピッピッ。」

ついに僕たちの演奏でパレードが始まりました。まずは、慶仕次区を回り、次に有銘区を回りました。そして有銘校に入りました。

次はいよいよ、舞台での演技です。

僕たち中学生の男子は棒術をすることになっていきます。でも、舞台には皆は入らないので学年順の演技ですることになりました。

中学一年生は僕しかいないので僕一人で演技することになっていました。この時僕は、胸がはちきれんばかりにドキドキしていました。そして出番。もうあともどりはできない！僕は覚悟をきめて舞台に出了ました。目の前に大勢の人がいて僕を見ていました。しかし、あつというまに僕の演技が終わりみんなが大きな拍手

をしてくれたので僕はとてもうれしくなりました。みんな無事におわたたので僕たちは他の人の演技をいろいろ食べながら見ていました。すると、僕が小学校のころの先生と会い楽しく話をしました。小学校のころの先生からでる言葉はほとんど同じでした。

「本当にてっちゃんね。やせたね。」

小学校のころの僕はとても太っていました。しかし、中学に入り部活をするようになって、僕は身長がのびて、やせていったからです。

こういう話が長く続き外も暗くなったので百周年がおわり、外であそんでいた僕たちは体育館の片付けにとりかかりました。

この日は百年に一度しかない大行事なので、僕にとつても、有銘校のみんなにとつてもよい思い出になりました。

次は二十年後のタイムカプセルです。その日まで元気に過ごしていこうと思います。

二十年後が楽しみだな。

## 百年の長い歴史を越えた学校

一年 仲 嶺 奈 月

「ピーピーピッピッピッ」

指揮者のベルの音で始まった有銘小学校百周年記念式典。パレードが、次々と進んでいく。校門には、手作りの大きな門が建てられ、パレードは、その中へ引っぱられるように行進していく。吹奏楽のファンファーレで、除幕式が行われた。私はまちがえないよう緊張しながらドラムをたたいていた。除幕式を終えると、国民学校の卒業式が行われた。この式典の中で、一番印象に残った卒業式でした。

戦争が終わって50年がたつた今、無事に卒業する卒業生を見て私は、ひどく心を打たれた。この場で、証書を手にした時、ふとあの恐ろしい戦争を思い出した。ただろう。私は戦争という言葉を知ると、ある先生が教えてくれた言葉「人間が人間でなくなる時」ふとその言葉が、頭の中をよぎった。

恐ろしい戦争を味わってきた人々は、

今という時を、本当に幸せだと思っている。そして、これからの平和を願っているのだろう。

何も知らない私たちは、戦争という恐ろしい物を二度と起こさない未来にしていかななくては、いけない。と、卒業生に言われたような気がした。その卒業生の中に、私の祖母もいる。そして戦争の話は、たびたび聞いた事があります。私は、このような式を持てた事が、そして、その卒業生の喜びが、今にも、まだ目に焼きついていきます。この卒業式が終わると、式典が始まりました。学年別に演技を発表しました。私達女子は、ましゅんく節を踊り、男子は、棒術を披露しました。この行事が成功した喜びや満足は、言葉に表せないぐらいでした。

今思えば、創立百周年とは、長い年月を越え、それを私たちは、身近に体験した事は、生涯忘れる事のできない一つの記憶として、私達の中へ埋められているだろう。そして20年後、開けるタイムカプセルとともに、再び、私達の中でよみがえるだろう。私達にとって一番最高の

思い出が、また一つ増え、忘れられぬ唯一の記憶の一ページに強く刻みこまれるだろう。

有銘小学校、百歳 おめでとう。

## やればできるの心で

二年 比嘉弘樹

「きつい。早く終わりたい。」

僕は今、放課後に陸上練習をしています。

僕は短距離の練習をしています。少しきついメニューもあります。僕は百メートルを何本か走ると、「あーまだか、きついなー。」などという言葉がよく口から出てしまいます。それと、準備をやる時も、ダラダラする時がよくあり、先生によく注意されています。

それは、練習が大変でなぜ毎日毎日、やらないといけないんだ。という気持ちがあつたからだと思えます。

みなさんは、練習の時「はあ難儀。」

などとは言わず、大変でも気合いを入れて練習をしているでしょうか。

僕は手が痛くて、練習を休んだことがあります。その時僕は初めて、みんなが頑張っている姿を見て、なんだか自分は、みんなより一歩負けてしまったような気がしました。休んだ分、自分が損するだけだ、これくらいで練習を休んだらダメだと、この時思いました。結局練習中の、「つかれた。」などの言葉は、自分に対する甘えかもしれません。

やっと練習が終わり、「はあ今日も頑張ったなあ」と、自分自身思うことがあります。でも、僕は自分の力を全部出したつもりでしょうか。たぶん、少し手を抜いて走っていたかもしれません。

短距離のメニューも、楽に思えるかもしれませんが、そんなに楽ではないんじゃないかと思えます。

でも、中長距離の人達は、もつときついメニューをしているのに、「はあ難儀。」という言葉は言わず、それ以上に頑張つて走るべきだと思います。

僕はたまに、学校が休みの日の夕方、

父と二人で五キロくらい走ることがあります。父はいつも僕に、走ろうかと言います。僕が、「はー、つかれたー。」と言くと父は僕に、「走らないと負けるよ。走ろう。」と言う、その言葉で僕は、「よし、頑張つて走ってみよう。」という気持ちになります。

そして、ほかの人で、朝練をしている人もいる、オレは朝は走れないので、夜走ろうという気持ちになります。

或人が、こんな言葉をいっていました。「みんなと同じような練習をしても、同じように伸びていく、それ以外で走れば、絶対に他の人よりも伸びていく」、その言葉を聞いて、その通りだと思いました。本当にきつい練習の時も、これを利用して、越えれば、精神も絶対に鍛えられ、次に何かに向かって、挑戦するときにつながると思えます。これから僕は、いろいろな大会に向けて、これからの練習も頑張つていきたい。そうしないと、自分の目標タイムを切ることもできないと思えます。

これからは、「はー、難儀。もう終わ

りたいない。」などとは言わず、目標タイムに向けて、「やればできる、為せば成る。」の一言で頑張りたいと思います。つらくても目標までやらなければ、力もつかないし、自己記録もつくれなれないと思います。

やっぱり言葉で言うのは、簡単でも、実行するのは難しいと思いますが、僕は、その言葉通り、自分ができる所まで頑張りたいと思います。

「やればできる、為せば成る。」の心で。

## 有銘校の百周年

二年 島 袋 翼

この一年、ぼくたち有銘校の生徒は、百周年のため、いろいろな行事をしました。有銘中の全生徒で2つの区を回ったパレード、戦争でむかえることができなかった、先輩達の卒業式、百周年記念式典、そして祝賀会などをしました。その中で、ぼくが、一番楽しみにしていたの

は、百周年記念式典でした。始めは、しっかり姿勢を正して話をきいていましたが、やはり、2時間ぐらいたわって話を聞くのは、大変でした。

先輩達の卒業式では、近くに住んでいる顔見知りの人や、はじめて見る人などいろいろいましたが、先輩方に会って、初めて百周年という物の重さを実感しました。先輩方の卒業式を見てみると、「クラス〇名中〇人戦死」とかが、たまに聞かれ、「戦争は、幸せな家庭をも、小さな小学生の一生をも、一瞬にして、こわしてしまふ。こんなざんこくな、戦争などという物は、2度とおこしてはならないな。」と思いました。

それから、この百周年記念の行事で、ぼくが一番がんばったのは、なんといってもパレードでした。ぼくら中学生は、吹奏楽をして、有銘、ゲサシの両区を回りました。途中で歌詞を忘れて、失敗した所もありましたが、一生懸命がんばりました。

式典、パレードなどとてもつかれるも

のばかりだったが、ぼくは、何一つそんな物はないと思っています。

有銘小中学校創立百周年、とてもすばらしいことだと思います。ぼくらは、二十年后に開ける予定のタイムカプセルを、学校の校庭にうめました。二十年后がとても楽しみです。二十年后はぼくは三十四歳、ぼくはきつと、ツアーコンダクターになって世界を飛び回っているでしょう。クラスのみんなは何になつているのでしょうか。

三十四歳になつて、有銘校に来た時は、みんなきつと思ひ出すでしょう。小学校のころの思ひ出を、そして、みんな楽しく話し会いたい、楽しかった小中学校生活のことを、そして百周年のことを、ぼくは一生百周年のことを忘れないでしょう。

## いははじめた沖繩戦の傷

有銘中二年 仲 嶺 静 香

現在、平和である沖繩、でも、五十年も過去へさかのぼれば、恐ろしい戦争がこの沖繩でおきていたことを一冊の本から学んだ。「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」

ひめゆり学徒隊は、もともと教員をめざしていた16〜20才の女の人達で、むりやり戦場の看護婦にかり出された。負傷兵の看護をするためである。

16才〜20才までの弱い女の人達が戦場へ行くのだ。これこそ命がけなのに負傷兵の看護もしなければならぬ。なんて、私だったら逃げているだろう。学徒隊彼女達は恐くはなかったのだろうか。死ぬのも覚悟のうえなのだろうか。私は、そんな学徒隊の姿を書かれた文章を目で追っていった。まるで、自分が戦場にいるかのように。

学徒隊が最もおそれていたのは水くみである。水をくんでいる最中、爆弾が飛

んできたら、それこそ一巻の終わりである。重い水を自分達で防空壕まで運ぶのだ。雨ふりだったら、これこそ辛いだろう。舗装されていない道はデコボコして歩きにくい。えに、転びやすく、水をこぼしてしまうおそれがあるからである。

毎日行われていた包帯交換は、そのうち衛生材料が不足し、三、四日おきという具合になった。すると、ウジが傷口から湧き出してきて、包帯の上をはいまわす。学徒隊は気持ち悪くなかったのだろうか。私だったらウジを取ってあげられたらどうか。多分、取れずにうずくまっていただろう。包帯交換のときだけピンセットでウジを取り除くと、負傷兵は気持ちがいいと言って喜んだ。

そんな負傷兵の嬉しそうな笑顔を見られるだけで、学徒隊は負傷兵の看護、命がけの水くみをがんばれる事ができるのだらう。

私の祖母に戦争の話聞いてみた。自分からなかなか話してくれないので無理をお願いすると、やっと重い口を開いた。その当時、祖母は本島本部にいたそうだ。

かくれていることを知っているかのように飛行機が飛んできては爆弾をおとしていったそうだ。おばあちゃんはその爆弾から身を守るので必死だった。けれども次から次へと爆弾が雨のようにふつてきては森を焼き野原にしていた。足にケガをしていても痛いとは感じなかったそうです。それほど恐怖がおばあちゃんのことを支配していたんだと、私は想像を絶する状況があったことを知った。その爆弾がふつてきた場所をおしえてもらったが、何と私達がいとも見なれている山のふもとであった。こんなにも身近かで戦争をやっていたんだと大変驚くと同時に、戦争が今までも身近に感じられました。

防空壕の中には、艦砲の音はほとんど聞こえないが、地響きがしてくる。それは不気味なものである。それでも、壕の中は何十倍も安心感があった。安心していただけの中に、黄燐弾とつとガス弾が、次々と投げこまれてきた。

どうして外に逃げないのか、恐くはないのか、どこまで自分の感情をおし殺し、



がまんするのだと本の中の学徒隊が近くにいるかのように私は心の中で恐りにも似た気持ちで叫んでいた。だが、私も迷っている。ガス弾で死ぬか、壕の外に出て爆弾や鉄砲で死ぬか、当時、教えられていたこと―捕虜となり辱しめをうけ殺されるか。たぶん、彼女らも迷っていたにちがいない。

今、本を読み終わって、戦争は恐ろしく、残酷だと痛感した。戦争だけのために、多くの犠牲者が出て、多くの悲しみが生まれた。あれから五十年、多くの悲しみがいえはじめ恐ろしい戦争が忘れ去られようとしている。そんな恐ろしい戦争が、これから又、起こってしまわないように、戦争を知らない私達が戦争というものを真剣に考えなくてはならない。戦争は、恐ろしいだけじゃなく、みにくいものも又、多くの悲しみが生まれるだけのものである。平和の礎の字をなぞりながら今、なお涙する老婦人を見ながら、私はそう心に強く感じました。

## 戦争の悲惨さ

二年 宮里 亜沙子

「戦争」一言葉でいうとたった4文字の言葉なのに、実際、沖繩で起きた戦争は、5年間もつづいた。その戦争で悲惨な人生を送ったのは、一六歳から二十歳までの若いひめゆり学徒隊である。

毎日、食べるものもなく、水を飲むのにも命がけで水をくまなければならぬ。従軍看護婦として戦場に行かされ、毎日負傷者が壕に運ばれ手当をしなければならぬ。やがて、手術をする麻酔もなく、足や手はのこぎりで切った。壕の中は、暑気、ノミ、シラミ、ウンカがあり、窒息しそうだった。

そして、一番つらかったのは、自分の友達が目の前で死んだ時だっただろう。しかし、戦争がだんだん激しくなっていくにつれて、自分の友達が目の前で死んでも、もう人間らしい感情もなく、ただ自分も死を待つだけの人達が多かったらしい。私はとても悲しくなった。自分の

知っている人が目の前で死んでいるのに涙さえもなく、ただ自分もこうなるのかと死を待っている姿を思い浮かべると、戦争は何と無惨なものだろうと思つた。

私はある人から戦争の話聞いたことがある。戦争中は、いろいろな病気が発生したが、治す薬もないので次々と病氣にかかった人達は死んでいった。その人も病氣にかかったが、運良く薬があつたので一命はとりとめた。しかし、栄養のある食べ物になつたので、食べられる物ならなんでも食べたそうだ。カエルだつてソテツだつて猫だつて。そのおかげで、今は元気に暮らしている。あのころは毎日が地獄のような日々だったとその人は言う。

私はこの話を聞いて、自分がとても恥ずかしくなつた。私はとても好き嫌いが多くわがままばかり言っていた。昔の人が私を見たらなんと言うだろうと思うと、とても恥ずかしくなつた。

戦争で一番傷ついていたのは、多分子供達だと思ふ。戦争で親を失つた子供達は、ただ親を捜しつづけ、鉄砲の弾がとび交



う中、さまよいつづけていたそうだ。  
一、〇〇〇人から二、〇〇〇人もの戦争  
孤児がその戦争で残されたのだ。私は頭  
の中に、一面、焼野原になった戦場を、  
泣き叫びながらさまよい歩く、戦争孤児  
達を思いうかべていました。でも、その  
子供達を温かく助けてくれた一例が米兵  
だったという。戦災孤児はアメリカ軍の  
収容施設に集められ、そこで看病されて  
いた。しかし、全員が元気になるとは限  
らない。毎日栄養失調や脱腸で多くの子  
供達が死んでいった。アメリカ軍は驚く  
ほど食糧をもつていて、ミルクやお菓子  
や缶詰を与えてくれたらしい。しかし、  
長い間栄養分をとつたことのない子供達  
の体は、どれも受付なくて、与えると下  
痢をおこしたそうだ。

今、私は一体何をしたらよいのだろう  
か。よくわからない。でもこれだけは自  
信をもつて言える。戦争は二度としては  
いけないという事を。ひめゆり学徒隊の  
女性達は「生きる」という言葉を胸に抱  
きながら、死んでいったのだらう、戦争  
で亡くなった人達の心の叫びを私は聞い

たような気がする。戦争で亡くなった人  
達の命をむだにしないためにも、これか  
らの私達は二度と戦争をしてはいけな  
い。そして、いつの日も平和で暮らせる  
ようにしたい。

## 百周年式典を終えて

三年 田場 純子

平成七年七月二日に百周年記念式典を  
迎えました。去年から式典の準備が始  
まり、とても忙しい日が続き、私達は中  
学三年生という最上級生になりました。  
学校の先頭に立つて百周年を成功させな  
ければいけないという立場になりとても  
責任を感じました。こんな大きな行事を  
するのは皆初めてで、何をどうやればい  
いのか全々分からずあせりの気持ちにな  
る時もありました。私達はまずパレード  
があるというので吹奏楽を練習しまし  
た。歩きながらの楽器演奏はとても難し  
く、リズムを取るのがたいへんでした。

それと同時にアトラクションでの出し物  
の練習も始まりました。私達女子は舞踊  
をやることになり、毎日放課後に練習し  
ました。それとは別に生徒会役員の仕事  
もあり、私はとても休む事ができないく  
らい忙しい毎日でした。あわただしい日  
がどんどん過ぎ当日を迎えました。校舎  
は百周年ということできれいに飾られい  
よいよパレードで式典がはじまりまし  
た。有銘校の卒業生や先生方、関係者の  
人々がかつけ盛大な式典が開かれまし  
た。次々に私達の出番がきて、きんちよ  
うがずっと続きました。大きな失敗もな  
くみんな無事に進行し百周年式典を成功  
させることができました。私はこんな大  
きな行事を成しとげることができてうれ  
しい気持ちでいっぱいになりました。自  
分達の手で百周年をやれたということは  
私にとって大きな宝となりました。百周  
年を通して自分に自信がついたような気  
がします。これからもずっと私にいろん  
な事をあたえてくれた有銘校がかわらず  
いてほしいと思います。また、これから  
の有銘校の発展を祈りたいと思います。

I enjoy speaking English now.

又 吉 朝 絵

私達は今、どうして英語の勉強をしているのでしょうか。私は、英語で異国の友達とおしゃべりしたいからです。世界の言葉と言われている英語が話せたら、きつともっと自分の世界が広がって、私の夢に少し近づけると思うのです。

中学二年の夏、私の夢がかなうチャンスがありました。

「My name is Aseae.」

それは、自己紹介から始まりました。一週間のホームステイ。父、母、兄、妹の四人家族の家に世話になりました。昼間は子供だけであちらこちら散歩して、夜は家族団らんです。牧港基地内なので周りの会話は全部英語。基地外への電話も国際電話です。沖縄県内といえども気分は、もうすっかり外国の地。

しかし、楽しいことばかりではありません。

「Do you like fruit?」

と尋ねられたとき、

「Yes.」

だけで終わるのはとてもさびしく、もっと話したいと思っても、なかなか英語で話すことができません。Yes. No.の簡単な会話だけではなく、疑問文はもちろん、肯定文、「どんなふう楽しかったか」など私の考えていることや感じていることを、もっと相手に伝えたくて、とてもはがゆい思いをしました。

「Let's take a picture with me.」

私がホームステイ中、特に緊張して言った会話です。兄のジミーが一度では理解してくれず、勇気を出して再度チャレンジ。どこかまちがっているのかなど不安に思いながら。

「OK.」

とジミーが返事してくれました。私の言葉が彼に通じた!!「わぁー」と、心がさわぐよううれしさです。このホームステイで自分の考えていることを英語で話す楽しさ、私の英会話を通じた時の嬉しき、十分に英語で表現することのできない悔しさを実感しました。

「Good morning everyone.」

授業の始まりです。文法を学んで、単語の確認、教科書を読む。これを継続して、ある程度マスターしたら、もっと多くの事について話してできるようになるだろう…。私は英語の勉強がとても楽しくなりました。

ニコラ先生は、イギリス出身の月に何度かおみえになる外人教師です。私達に教科書を読んでもくれます。英語独特の鼻をつまんだような言い方に私はあこがれています。

三年生になって、ニコラ先生と会話するチャンスがありました。先生の声を聞くと、どんどん、自分の思っている事を表現したくなりました。言いたい事を日本語で考えて、単語と文法を集めて頭の中で順序よく整理しました。やっぱり、切りだしは、上がってしまいましたが、ドキドキして楽しいと全身で感じました。先生が「英語、上手になりましたね。」と感想もおっしゃってくれてうれしかったです。最近では、道ばたで外人を見つけると、胸が高なつて、「話したい」と強

く思います。

I had a good time.

私の夢は、アメリカへ留学することです。いいえ、アメリカだけではありません。インドやヨーロッパ、エジプトなど日本とはまったく文化の違う国に思っています。その夢がなかった時、私は異国の地で外人と英語で話しているのです。その国の生活を体験しているのです。想像すると、ゾクゾク、わくわくしてきます。

私は、今、沖縄県に住んでいます。県でも都市から離れた北部にある有銘という地域で、家も学校も山々に囲まれたとても風光明媚な村です。亜熱帯なので年中夏といわれ、そのせいか人々ものんびり生活し、時間もゆつたりと流れています。

祖母達の会話はほとんどが方言で、時々私にも意味のわからない言葉もあります。が、とても親しみを感じています。例えば、「ゆくれー(どうぞゆつくり休んでいって)」「チャーびらさい(ごめん下さい)」など、共通語に訳することの

できない温かい語感がとても好きです。

言葉というものは、その土地独特の雰囲気を持つていてその土地の人々の生活と密着していると思うのです。言葉を通じてその土地柄を知ることができると思うのです。

私は自分の生まれ育った有銘が大好きです。だからこそ、この小さな村、有銘、私の母国日本を飛びだして、広い世界をみたいのです。

日本と全く異なる風景の中でその国の文化にふれてみたい。英語という言葉を媒介にその土地独特の言葉を知ることができるでしょう。その土地に生きている人々と出会うでしょう。

今から十年後は私はもつと世界を近くに感じているでしょう。その時、私は気軽に英語を口にして陽気に歌でも口ずさんで世界各国を飛びまわっているのです。

## 赤とんぼ

有銘中学校一年 仲宗根 幸恵

大空高く舞い上がる

赤い夕日に包まれて

赤い雲に囲まれて

すすきの上を飛びまわる

我が者顔で飛びまわる

沈む夕日

消えゆく雲

辺り一面暗闇へと化する

空を見上げてみると

もはや大運動会も

夢の跡――

すすきの上をとんぼが

一匹とんでいった

はとよ未来へ

二年 仲嶺 静香

沖縄の希望と平和への願いを  
その小さな胸にひめ  
力強くはばたけ

沖縄の喜びと過去の悲しみを  
その真つすぐな目で  
やさしく見守り

沖縄の誤りと深い反省を  
その大きな翼で  
やさしくつつみこみ

心の傷がいえる日まで  
そして、たえることなく

Hello. My name is  
Masaki. I'm from  
Higashi, Okinawa.  
Higashi is in the  
country. But  
Higashi is a good  
village. We can  
see the Pacific  
Ocean. There is  
Geshashi Tower in  
Geshashi. I love  
Higashi.  
The end

和歌

二年 仲嶺 静香

夕暮れに  
小さい灯  
みつめれば  
いとしく思う  
母のぬくもり

俳句

三年 田場 純子

なすびみて、  
ある人思い、  
笑い出す



まぶたとじ  
風の香りとささやきと

卒業

仲宗根 幸

卒業  
9年間の月日と  
有銘校に さよなら  
通いなれた通学路と  
見なれた顔に さよなら さよなら  
でも「さよなら」は  
口に出して言わないんだ

「さよなら」を言ってしまったら  
二度とみんなに会えない気がするから  
そのかわりに  
沢山のありがとうを言って  
涙をこぼそう  
過去の思い出を  
明日に背負って  
新しい旅を  
始めよう

See you...

Our friends and School

English Poem

My friends by Sachi Nakasone  
Familiarity Reliable  
Enjoy Understand  
I like together.  
They are very good.  
My friends.

Sharan Q by Asae Matayoshi  
Bright beautiful  
Good looking moving singing  
I like it very much.  
It is very good.  
What a beautiful voice!  
Sharan Q Sharan Q

Angler by Tomoki Okuma  
Big fish fighter  
Exciting  
Happy sad  
Put bait on the hook  
Beat pond wait for big fish  
Angler

New Year by Nobuyuki Kinjo  
New year happy year  
New year's gift  
I get a new year's gift  
Happy  
New year

Flowers by Shizuka Higa  
Flowers  
Wonderful colorful  
Moving Skating coming  
Making Flowers are fun for me.  
Flowers

New Year by Junko Taba  
Early time complex  
Studying writing eating  
Time called soon.  
I have a lot of things behind.

New Year

New Year by Tomoki Okuma  
New Year  
A new year's gift penmanship  
Starting eating vaining  
I want a girl friends.  
New Year

New Year by Shusaku Furugen  
New Year  
Mochi happy  
Eating bokuju  
I'm very happy.  
I have many new years card.

Vacation by Junko Taba  
Happy glad  
Moving playing singing  
Vacation needs for me and hamily.  
Vacation

New Year by Sachi Nakasone  
New happy  
Starting waiting Laughing  
I think of everything.  
Challenge  
New Year

New Year by Shizuka Higa  
New Year  
pleasanting losing  
Moving happening eating  
Losing age  
New Year New Year

Muraosa by Shusaku Furugen  
Muraosa  
Eating working  
beartiful wonderful  
Muraosa



## 棒高生活

三年 古堅 周作

ぼくは棒高を始め  
最初はとてもヘタだった  
そして、なまけ者だった  
最初は、3メートルもぐらいとべりやい  
いなと思ったけど3メートルをとび何  
度も優勝し何度か負けた。  
高校生のをみると  
やっぱおれはヘタタリだと思った。  
そんな棒高跳びをつづけてきた  
日々を  
多分忘れないだろう。

## 中学生

三年 田場 純子

新しい制服を身につけ  
私は入学式を迎えた

あれから三ヶ年

あつという間に三ヶ年

後ろを振り返り 何を見つけ

涙 笑顔 苦労 驚き

そして感謝

卒業という二つの文字が

私の前に立ちはだかり

喜びと悲しみの二つをこみ上げさせ

心を動かし迷路のように

ありがとう 中学よ

ありがとう 三ヶ年よ

三年 比嘉 静香

小さなちいさな手をつなぎ

喜びという名の門をくぐった私たちが

今大きな心で

大きな相反するものを心に抱き行くだろう

心に抱き行くだろう

きれいな花が赤いリボンのついた黒い筒

に変わるとう

私達は実感し、夢見るだろう

卒業という名の悲しみと  
卒業という名の喜びを

## 卒業

三年 金城 和貴

とうとう卒業

今まで長かった時間も過ぎようと

しています

さようなら さようなら

有銘中学校

## 卒業

三年 田場 純子

卒業 卒業

卒業式の一粒の涙

別れを悲しみ

卒業を祝う

おめでとう



おめでとう  
と言われながらも  
二粒の涙を流す  
卒業 卒業

## 中学三年生

三年 又吉朝絵

自分を見つめ  
多くの人生を考えた  
多くのものを求め  
広いものの中から  
夢をさがした  
支えながら  
悩んで  
一つの自分のゴールが  
みつけられたようだ  
ありがとう



仲よし中学3年生 (写真提供：又吉朝絵)

# 第六章



昭和30年代の学校周辺。右手が学校敷地、左手は崎山家。  
(撮影：金城棟永) 昭和35年(1960)2月14日

我が母校の思い出

# 一、座談会

●実施日時

平成八年六月三十日

●場 所

有銘小学校図書館

●出席者

島 袋 徳 盛（教師、昭和十四年～二十八年）

又 吉 慶 典（教師、昭和二十年～二十九年）

平 良 晨 勇（教師、昭和二十五年～五十一年）

大 城 博（教師、昭和二十六年～三十八年）

饒 波 正 行（四代PTA会長、昭和三十三年～四十四年）

上 原 朝 明（八代PTA会長、昭和五十一年～五十二年）

具 志 堅 興 徳（九代PTA会長、昭和五十三年～五十四年）

沼 倉 佐 智 子（第八期生）

〈司会進行〉

比 嘉 辰 雄（期成会副会長）

〈敬称略〉



座談会出席者で記念撮影 平成8年（1996）6月30日（撮影：山城定雄）

## 戦前の学校の思い出

司会 本日は期成会会長の島袋徳盛先生をはじめ皆様方にはご多忙のところ座談会にご出席を賜り誠にありがとうございます。本日まで出席いただいた皆様のお話に加え、多くの方々の回想録をもって記念誌に華を添えさせていただくことになっております。お蔭様で、ちょうど一年前の平成七年七月二日に百周年の記念式典、祝賀会が盛大に行われました。それを記念いたしまして、本日、平成八年六月三十日、有銘小学校創立百周年記念座談会を企画した次第です。今日は、お集まりいただいた皆様方に、戦前の学校の思い出、戦後の学校作り、戦後の学校生活等について、それぞれの体験を交えてお話をさせていただきたいと思っております。どうか、ざつぱらんにお気軽にお話していただきたいと思います。

その前に僭越ではございますが、座談会の参考にしていただくため、ここで改めて学校の沿革を簡単に申し上げておきます。我が有銘小学校は、明治二十八年の四月に有銘部落事務所を教室に、天銘尋常小学校として創立されました。当時は児童・生徒数二十名で四年制であります。そして、明治三十年に現在のこの場所に学び舎を移転しました。明治三十八年には六カ年制の義務教育となっております。それから、大正七年四月に高等科の一、二年が新設されまして八カ年になっております。大正十二年には、ご承知のように久志村より東村が分村をいたしました。それと共に、



校名も有銘尋常高等小学校と改められております。それから昭和十六年には有銘国民学校と改めました。その後はご承知の通り、昭和十九年～二十年の沖繩戦で校舎も失い教育は一時中断致しております。戦後は昭和二十年の十月一日に現在地に仮校舎を建設して、有銘初等学校、有銘中等学校と改め、九カ年の義務教育となっております。それから、昭和二十七年の四月一日に有銘小学校、有銘中学校と改められ小中校の併置校となりました。

このような幾多の歴史の変遷を経て、先ほど申し上げましたように昨年の四月一日に創立百周年を迎えることになりましたので、七月二日に記念式典を挙行させていただいた次第です。このように大変歴史のある我が母校、有銘小学校の記念すべき座談会をこれから始めさせていただきますが、まずテーマといたしまして先ほど少しお話し致しました。戦前の学校の思い出についてお話をさせていただきます。まずは、期成会長の島袋徳盛先生からお話をお願いいたします。

**島袋** 本日は百周年記念誌の資料収集のため座談会を企画いたしましたところ、お忙しいなかお集まりいただき厚く御礼申し上げます。なお本日は、旧暦で言いますと五月十五日で、親戚一同集まってお祈りする日になっていますが、皆さんお繰り合わせの上、ご出席下さいまして誠にありがとうございます。記念誌が立派にできますように、皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。

私は大正八年の五月二十日の生まれで、小学校に入ったのが大正十四年で、昭和八年に高等科の一年を終了し、それから沖繩県

立第三中学校へ入学しました。あの頃は中学に受験するのが一名ぐらいのものでした。三中に在校生が二、三名いましたが、昭和八年に受験したのは一人だけでした。そういうふうには、上級学校に進む人の数少ない時代でした。そんなわけで、大正十四年から昭和八年までの話になりますけれど、当時は、ご存じのように生徒の服装は着物でした。男子も女子も帯を締めていました。帯は男女とも後ろに結ぶように注意されていましたが、女子は校門に入るまでは前に結んで、校門に入ると後ろに結んで、帰りは校門から出るとまた前で結んでいました。足の方はみんな裸足で、裸足と言いますが、正月下駄を買ってくれましたので、お正月には一カ月くらいは下駄を履いた覚えがあります。



島袋徳盛

一番きつかったのは冬の寒い時期で、石ころの上を歩くのは辛かった。慶佐次では川を渡るのに、あの頃は竹馬で渡ったりしました。たまにころんでずぶ濡れになって着替えのために家に帰っていく人もいました。カバンもありません。男は風呂敷を肩から結んで、女は腰のほうに結んでいました。お昼の弁当もあの頃はほとんど芋で、お米の弁当は遠足とかお祭りの翌日ぐらいでした。お米といっても、おかずはほとんど無かったです。チキナの塩漬けがあればいいほうで、生味噌をもってくる人もいました。ほとんどが芋をタオルにくるんで通ったものです。今から考えるとよいう生きていたなど。朝起きてから芋を食べて昼食も芋でした。そういう時代でした。

それから学校は複式学級でした。今と違うのは理科とか地理、歴史というのがあって、五、六年の複式などですと、五年の理科とか六年の理科とかではなくて、両方一緒になって、「今年は五年のものを五年も六年も教える」というふうになっていました。だから、六年が五年のものを習ったりするわけです。逆に今度は六年のものをやるとかで。担任が考えたんでしような。今はありませんけどね。

**司会** 鳥袋先生大変ありがとうございました。鳥袋先生が入学された大正十四年と言いますと、既に六カ年制の義務教育になっておりまして、有銘、慶佐次、大湿帯、天仁屋（有津）の方も入るわけですが、今の義務教育とは違って、当時は家庭の事情で思うように学校に行けなかった子供もいると聞いていますけど。

**鳥袋** 当時は、子守をしなから学校に通っている生徒もいまし

た。学校に子供をおんぶしてきて勉強中に子供が泣きだしたら廊下に出て、ハイハイしてあやして、そういう生徒も実際におりました。同級生で子守をして学校を出ない人、義務教育を終了しない人もおりました。また、途中で下男奉公に行つて学校を出られない同級生もいました。

**司会** 続けて饒波正行さんに鳥袋先生の後をお願いしましょうか。

**饒波** 私は大正八年の四月五日生まれです。初等科の一年に入學したのが大正十五年の四月ですが、大正十五年の十二月に大正天皇が崩御いたしましたので、昭和元年の一学期には、先生方は左腕に黒い腕章をしていましたね。一カ月ぐらいだったでしょうか。生徒も左の胸に指ぐらいの大きさの黒い布切れを、その頃は安全ピンみたいなものはないですから、そのまま着物に縫い込んで一カ月間のイビ（忌）でした。それで私達は昭和元年の入学になっております。昭和元年に一年生で、昭和九年の三月に小学校高等科を卒業しています。

私は小学校を卒業してしばらくクサカヤーをしていました。家が農家で牛も馬も家畜がたくさんいましたから。また、あまりデキランヌーでしたので上級学校には進学しておりません。クサカヤーをしていて昭和十三年に南洋に行つて、そこで入隊して終戦を迎えております。そういうわけで戦前の十年間は故郷を留守にしています。その間のことはよく分かりません。昭和二十年か二十二年に帰つてきております。

**司会** ありがとうございます。次ぎに具志堅さんにお話をお伺





行 正 波 饒

いたいたのですが、よろしくお願ひします。

**具志堅** 私は大正十三年の生まれです。小学校に入ったのは昭和六年だと思ひます。当時、ほとんどの子供たちが学校に入ったわけですが、ところが、一年、二年、三年と進んで行くうちに減つていつて六年までには約半分ぐらいになっていました。ほとんどが家庭の事情です。私達もヒンスムンで着る洋服がない、パントもない、スッポンボンで上から芭蕉布（バサージン）です。夏も冬もバサージングローを着て学校に通つたことを覚えていません。それで二年生の時に有銘の校歌を作つた松根校長先生が来られて、まず服装から直さなくてはならないという先生の方針で、二年か三年頃に制服を着けた覚えがあります。靴はその頃からス

ポーツシューズですね。それも親に無理を言つて買つてもらつたものですから、ほとんど履かなかつたですね。大事にして学校に持つて行つて、また家に持つて歸つていた。運動会以外には履かないぐらい大事なものでした。それとあの当時、我々が一番思ひ出に残つてゐるものに学校給食があります。今は全生徒に与えられていますが、あの当時はヒンスムンの子供達だけです。全部が全部じゃあないんですよ。ヒンスムンの子供達だけを対象にした給食で、一年から六年まで食べたんですよ。特によく覚えてゐるのが慶佐次の方々、慶佐次は金持ちが多かつたから、おいしい弁当を持つてくるんですよ。こちらの給食はほとんどがユシドーフでした。一度、テンブラが出たことがあるんですが、慶佐次の人達がお金を出して買ったみたいで一緒に食べた思ひ出があります。確かその当時、目取真のオバーという給食婦の方がいたように記憶してゐます。一年から六年までほとんどユシドーフでした。うちにはユシドーフというのがありませんでしたから思ひ出に残つてゐます。

それと、入学した時は十七、八名いたのが六年生頃になると十二、三名になってゐました。また、今は中学三年から受験がありますが、当時は頭がよければ六年からでも上級学校を受験できました。当時、佐久本スミ子さんという一番の秀才がいて、彼女は六年から名護にあつた第三高等女学校に入学したのを覚えてゐます。それで高等科になると、またその半分がいなくなりました。特に女子が少なくなりました。一応、高等科に入ることは入りますが、ほとんどが家庭の事情でやめていきました。あの当時は、

高等科ぐらいの年頃になると本土に出稼ぎに出っていました。女は紡績、男は鉄工所とかに行っていました。女の人はほとんど紡績に行つて、卒業するときにはあまりいませんでしたね。

ここに古い写真がありまして、写真の中にポールがありますが、これは当時、上地先生という農業の先生がいらつしやいましたが、その方を中心に学校の田んぼで得た資金と集めたお金で小学校高等科の卒業記念に造られたものです。私達と卒業する六年の人達の共同作業でした。それと思ひ出に残るのが、このデイゴですね。当時、有銘には沖繩一の天然記念物が二つありました。写真左側の茅葺きの家、養蚕室だと思ひますが、この家の近くにあつたガジュマルとこのデイゴの木です。学校に行くと、まず竹の棒をもつてデイゴの葉っぱを掃除してから教室に入ったことを覚えています。当時、先生は校長先生を含めて五名いました。確か校長先生が一年生、次ぎに二年生、次ぎに三、四年生、次ぎに五、六年生、そして高等科一、二年というそんな組織の複式学級でした。そして、卒業してからは青年学校というのがあつて、週二回、火曜日、金曜日でしたか半日出ていました。

**司会** ありがとうございます。今、具志堅さんから戦前の学校の様子や学校のシンボルとなつていた大きなデイゴの木（これは戦後までありました）など、いろいろと教えられるお話をしていただきました。また、先生方の様子などもお話をいただきましたが、昭和十五年までが尋常高等小学校ですか、それから昭和十六年に国民学校に校名が改まつているのですが、その校名が改まる時に何か特別なことがあつたのでしょうか。その辺り、鳥袋



先生ご存じですか。

**島袋** はつきり覚えておりませんが、特に何かあったという記憶がありません。昭和十六年に大東亜戦争が始まったわけで、その関係だと思えます。

**司会** 島袋先生は、昭和十四年に先生になられ戦後の二十八年までいらっしゃるわけですが、昭和十六年の戦争へつながるような教える側の動き、教育の変化などが見られましたか。

**島袋** その前に、具志堅さんのお話で思い出したのですが、今の校舎はまっすぐ一直線になっていますが、当時はパンジョウガニ（番匠曲）のように曲がっていました。曲がった所に二教室があつてデイゴがありました。それで曲がっているために二つ運動場がありました。浜側の東を東運動場、山側の西を西運動場とっていました。その頃の遊びは大体ボール蹴り。足は裸足です。から傷だらけでしたね。有銘と慶佐次とでよく勝負をしていました。遊びらしい遊びはそれ以外になかったですね。それから、さきほど戦争とのつながりというお話がありました、大東亜戦争が始まった昭和十六年、国民学校に校名が変わりましたが、当時は学校の様子にあまり変わりはなく、授業に差し支えるというようなこともありませんでしたが、十七、八年になって作業が増えてきました。山に薪を取りに行ったり、木炭を入れるタンクと言っていましたかね、それを供出しなさいというわけで、運動場に枠を作って、ススキを採ってきて編んで、これを供出してました。あれは軍にもっていくものだったんでしょうか。また、兵隊に出て男手のいない家の奉仕作業を試みたり、大湿帯に行つて

薪を午後から二回ぐらい運んだ覚えがあります。最後にはどうしてそうなったのか、運動場を耕して芋を植えていましたね。その他、馬草を刈ってきて乾燥させて供出したり、蒚かきの皮を剥いで乾燥させて供出したり、そういうことを学校でさせていました。昭和十九年頃からは教諭もほとんど召集されて、最後に残ったのは女教員と私と校長だけでした。小浜先生、玉城コウエイ先生、石嶺デンケイ先生、みんな召集されました。それから昭和二十年の三月は卒業式どころではなくて、山に逃げました。最初是有銘校の避難小屋のあるフクジマタの上にいましたが、そこも危ないということで大湿帯に逃れました。あそこには御真影奉護隊の仮屋がありましたよね、その近くに避難小屋を作りました。私もあれ



具志堅 興 徳

を作つてから防衛隊に召集されて小祿に行きました。

**司会** 昭和十六年に大東亜戦争が勃発し、国民学校に改称されますが、国民を挙げて戦争に向かつていくために、教育もまたそういう状況に置かれていたということが今の島袋先生のお話から伺えます。

さて、ここで少し話題を替えて、当時の生徒間の付き合い、先生と子供の関係、学校と父兄の關係がどういう状況であつたのか、明治三十八年に義務教育になっておりますが、教育費の負担等はどうかであつたのか、生徒としての思い出、先生との思い出、学校での思い出、その辺のところを具志堅さんから一つお願いいたします。

**具志堅** その前に、この古い写真を見て学校の構造が氣になつたものですから説明しておきましょう。まず写真の階段のついている所が入り口ですね。確か五つありました。右から一年生の教室、二番目が二年生、三番目が職員室で、その次が三、四年生、その次が五、六年の教室で、左側が高等科一年、二年の教室になつておりました。その教室のそばが御真影室で天皇陛下の写真を納めていました。そして、一番最後にトタンブリキがあつて、そこが校長住宅ですね。そして左側に小さなトタン葺きの小屋があるんですが、これが給食室です。そして当時は国の大きな行事として四大節というのがあつて、正月、天長節、紀元節、明治節ですね、そのたびに校長先生が燕尾服を着て正装して、普通はきれいな板で閉じられているんですが、御真影室をおもむろに開けて君が代を斉唱していましたね。印象に残っているのは、來賓がいる

んですが、軍国主義の時代ですから全部在郷軍人でした。あの当時の在郷軍人というのは、全部軍服を持っておるんです。勲章を持っていてる人はこれを着けて來賓として招かれていました。

私の一番の思い出として印象に残っているのが修学旅行ですね。卒業前に全員で行つた思い出があります。行き先は那覇でしたが、一週間の日程で、有銘から大湿帯を通つて三原に出て、そして宜野座小学校でまず一泊。すべて徒歩でした。二日目は宜野座から美里村の美東小学校まで行つてそこで一泊。そして、那覇で三日間過ごし、最終日はバスで帰る行程でした。感想としては、那覇まで徒歩で行つたこと、二日目の美東小に泊まつた時に引率の内間先生の家でおいしいごちそうを食べたこと、生まれて初めて那覇の街並みや映画や首里城を見たこと、有銘出身の仲嶺さんという方の経営している旅館でごちそうを食べたこと、すべてが初めての体験でした。今もって私の脳裏から離れない思い出です。

それと、学校の運動場ですが、当時は狭い運動場で、写真の運動場は拡張されてからのものです。それ以前の僕らが五、六年生くらいまでは中道があつて、ちょうど門の向かいにダンパチ屋がありました。運動場も二回廻つて百メートルぐらいじゃあなかつたかな。それに桑の木が三本ありました。

子供同士の付き合いですが、今みたいに学校から帰つたら一緒に遊ぶというようなことはなかったですね。みんな家の手伝いか何かをさせられていましたから。学校から帰るのが遅いとゴーグチハーグチの時代でしたからね。

**司会** 今、具志堅さんからもお話がありましたように、戦前は



昭和15年頃の有銘尋常高等小学校の校舎（写真提供：平良晨勇）

大変厳しい家庭環境の中にあつて、子供は学校に行かすよりも働かすのが親の努めだという、それぐらいの厳しさがあつたわけですよ。それで、学校に行つたはいいが、家の手伝いで一年休んで、また学校に戻るといふようなことがあつて、同じ学年でも年齢が随分違つたりと、そういう状況が戦前はたくさんあつたようです。それは学校に納める教育費の負担が問題であつたのか、家庭の手伝いや何かの事情で学校に行かせられなかつたのか、その辺を含めて昭和十四年から教鞭をとられた島袋先生にもう一度お話を伺いしたいのですが。

**島袋** 教育費のことはあまり分かりませんが、戦前は今のPTAにあたる保護者会というものがあつたように思います。それから、大湿帯の児童については、確か羽地村では、委託費とかいつて児童一人当たりいくらといつて、東村に納めてそれで学校に出していただくように思います。それである時期、暫くの間、羽地村が委託費を出さないことがありました。子供を学校に行かせなかつたのか委託費を出せなかつたのかよく分かりません。私が教員になつてからはそういうことはありませんでした。

**司会** 教育費として父兄が直接負担をしていたのかどうかも分かりませんね。

**大城** 教科書代は確か有償でしたよね。教科書代がなくて学校に出し渋っている父兄がいたという話は聞きました。

**具志堅** とにかく早く働かせたい、働かすために学校に行かせなかつたということがあつたんですね。教科書なんかはすべて自分たちで名護に行つて買っていましたよ。だから教育費が学校



から出るという覚えはないですね。

司会 「カムヤー（子守）するために学校イキランカッター（いけなかつたさー）」というのが昔の話にあるんですが。そうしますと、学校に直接的に納めるお金が無くて学校に行けなかったんじゃないかと、今のお話にあったように、教科書代とか家族が生活するために低年齢だけでも働いてもらわなくてはならなかったと、そういう状況でなかなか思うように学校を出られなかったということですね。さきほど饒波さんからもお話がありましたように、下男下女ということでも奉公させられて学校へ行けなかったということもたくさんあったわけですね。そういう社会的な状況で学校になかなか行けなかった。「歳はアリ（あれ）とユヌトウシヤシガ（違う歳だが）学校や私と同期」ということになったわけですね。

まだまだ戦前のお話がたくさんあるかと思いますが、次に戦後のお話をしてその後に共通の話題として、戦前も戦後もひっきりぬめってお話をしていただこうと思います。特に沼倉さんや朝明さんなどは黒板が無くて地べたに字を書いて勉強された時代でもありますから、その辺の学習の状況、それから教科書のこと、戦後になりますと給食の問題とか、いろいろと出てきますので、その辺を含めまして学んだ側からお話していただきたいと思います。



昭和28年（1953）頃の校舎（写真提供：山城定雄）



## 戦後の学校づくり

司会 まず又吉さんからお願いいたします。

又吉 昭和三年十月十日生まれの又吉慶典です。慶佐次の出身です。私は国民学校は出ておりません。尋常小学校の最後の卒業で、私は父の仕事の関係で有銘の学校を出たのは、一年、四年、五年、六年で二年、三年は那覇の学校に行っておりまして。それで、戦前の有銘校の思い出というのはたくさんはありませんが、戦後の思い出はかなりあります。七カ年有銘の学校にお世話になりましたので、後ほどいろいろお話をしたいと思います。

大城 大城博です。昭和七年生まれで、福地又の出身です。昭和十四年に尋常小学校に入学して、そして国民学校、戦後の七、八年を経験しました。戦前、戦中、戦後の経験者じゃあないかなと自負しております。

平良 平良晨勇です。本字（むら）の出身です。昭和十四年の四月に尋常小学校に入学しました。私は六年生の時に名護の第三中等学校に合格し、終戦の年に名護の田井高等学校に入学しました。昭和二十五年に教鞭をとることになって本校に戻ってきました。

上原 上原朝明です。昭和十一年生まれの石田の出身です。私は戦前少しだけ学校を出て、すぐに一〇・一〇空襲に追われて、戦後になってまた学校に戻ってきました。戦前のことは少しだけ



経験しております。

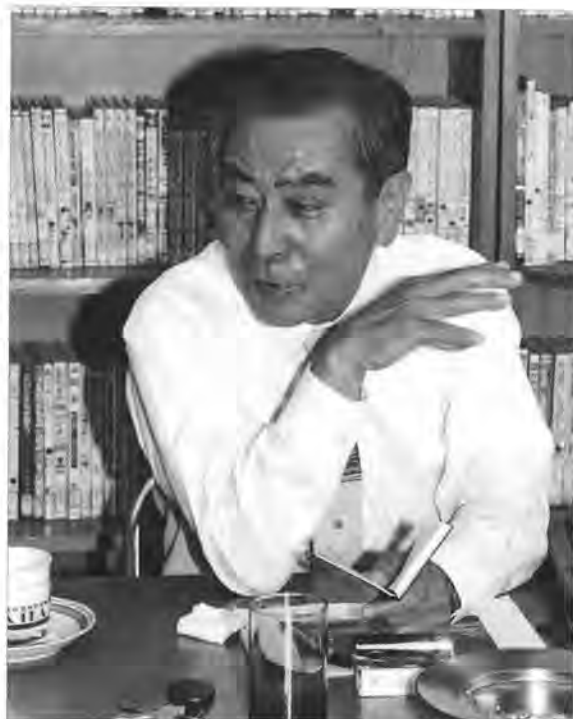
沼倉 昭和十六年三月生まれの沼倉佐智子、旧姓・崎山です。有銘校に一番近い家に住んでいまして、いつもチャイムが鳴ると塀を飛び越えて学校に走って行く生活をしていました。記録を調べてみますと、一九四七年、戦後二回目の新一年生ですか、そういうことになっています。

司会 自己紹介ありがとうございます。これからは戦後の学校作り、戦後の学校生活等をお話いただきたいと思いますが、慶典先生、大城先生、平良先生につきましては、戦前の教育や学校生活にも関わっておりますので、戦前の方も少し付け加えながら、戦後のお話をしていただこうと思います。まずは又吉先生からお願いします。

又吉 戦後の思い出ということですが、有銘校は戦後二十年の十月一日に開校ということになっております。その前は慶佐次は慶佐次、有銘は有銘で学校を作っていた覚えがあります。有銘と慶佐次が一緒になって有銘小学校の開校ということになっておりますが、慶佐次が一緒になったのは確か十二月の十六日だったんじゃないかと思えます。というのは、有銘校の助教諭を拝命というのが私の履歴書にあります。これが十二月の十六日になっております。その前は慶佐次はカニクに学校がありました。有銘の学校が始まった頃は本字が全部焼けて石垣だけが残っております。もちろん、校舎はありません。その石垣にロープを引っかけてテントを張り、日除けをしながら子供達と一緒に勉強したことを覚えています。それから暫くして米軍の野戦用のテントが配ら

れて、それが二、三カ月続きましたでしょうか。その後、PTAの組織が、当時はそんな名前ではなかったかもしませんが、確か宮城リョウゲンさんを中心にして始まったんじゃないかと記憶しております。

そして、みんな一緒になって茅葺き校舎を造り始めたんです。その頃から少しは落ち着いてきて、それ以前は教科書もなにもありませんでした。茅葺校舎ができた頃から小さな教科書ですね、今で言うB5の半分くらいの大きさでガリ版刷りにしたようなもの、それを使ってやつと授業らしい授業が始まって、そして高校進学が始まったんですね。これは「思い出の原稿」にも書いていますが、とにかくみんな一生懸命でしたね。朝学校が始まって六



又吉慶典

時間の授業をしていった家に帰します。有銘の子供達は家に帰っていましたが、慶次の子供達は帰らないんです。みんな学校で自炊なんです。学校に食材をもってきて夕食をすませます。有銘の子供達が学校に戻ってくると晩の授業が始まります。結局、晩も四時間か五時間勉強をしていました。ちゃんと時間割も作って課外授業ですね。そして終わってもみんな帰らないんです。そのまま茅葺校舎の屋根裏で寝ていました。合宿ですね。もちろん男女別です。先生が一人毎日交替でついていました。当時は電気がありませんでしたから小さな石油ランプを利用して、下で四時間くらい授業をして、十時くらいになるともう寝ましょうと上に登って雑魚寝です。茅葺きでも天井の低いところで寝起きしていて、よく火事が起こらなかったものだと思います。それから暫くしてA Jカンパニーから三キロワットの発電機をもらって、それからは電灯の下で勉強できたんです。しかも三キロワットというで一教室で使うにはもったいないものだから、今度は電線をもらってきて普通の丸太を使い、三年生みんな配線工事をして、本字全部に電灯を入れました。電灯代をいただいたり、また、その電力で巡回映画もできました。あと山羊を飼ったりして、学年費を捻出していました。石積み校舎ができるまで、高校進学、大学進学に向けて一生懸命頑張りました。

**島袋** 学校で寝泊まりしたという話がありました。冬の寒い時などは藁に潜って寝ていましたね。学校の裏で米を作っていて藁が積まれましたからね。それにしても、茅葺校舎のランプでよく火事を起こさなかったものだ、その当時泊まった方々か

らよくお聞きします。  
**司会** 続きまして大城先生。戦前のお話も付け加えてお話しだけでもか。

**大城** 自己紹介で申し上げましたように昭和十四年に尋常小学校に入学して間もなく戦時体制です。国民学校、国民総動員時代に入りまして戦時色が濃くなった頃の小学生であるわけです。当時の学校の様子と子供達の様子についてですが、まず学校の様子を申し上げますと、あの当時から思っていたのか教育という仕事についてから思うようになったのかよく分かりませんが、教育環境には非常に恵まれた学校だったなと思います。校歌にもありますように学校の前には清い流れの有銘川、そして田んぼが青々と



大城 博

して、後ろにはウガンジュがでつかく構えてた。当時は木々が鬱蒼と茂っていた。今はちよつと木が少ないですが。そして何よりも印象に残っているのがデイゴですね。初夏、デイゴの花の散る頃に朝登校しますと、運動場一面が真っ赤になっていて絨毯を敷いたようになっていゝんですね。先ほど具志堅さんからもお話がありましたように、本当に掃き捨てるのがもつたいないような気持ちがありました。この四本のデイゴは情操教育という面で非常に価値があり、また、大きな働きをしたんじゃあないかと思いません。

それと、先ほどの写真には有りませんが、写真の右の方にもう一つ茅葺きの校舎がありました。二年生の頃でしたか、塀を飛び越えて後ろの畑に飛び込んで、農業の先生に怒られた思い出があります。また校舎の隣に二本の松の木があつて、そこから眺める海岸の景色のよさは、今でもありありと頭の中に残っています。そういう非常に景色がよく、心に潤いを与えてくれるような、のどかな農村の風景が広がっていました。そういう素晴らしい学校環境であつたと思います。

また、その当時、先生との関係で二つほど印象に残っていることがあるんです。二年生の頃だと思いますが、翁長信先生といつて、学校を出たばかりで有銘が最初の赴任校の先生がおられました。キレイで非常に優しい先生で、子供達に大変好かれていました。その先生に教えられた学芸会の劇の練習が非常に印象に残っています。確か「因幡の白兔」で、慶典先生の弟の清君が兔になつて、大国主命が佐久本清実、悪役のワニを私達がしました。そ

の先生は台詞を覚えるのに教室だけでなく、近くの山に連れて行ってそこで指導したりしていました。そんな優しく暖かい指導が非常に印象に残っています。もう一つ印象に残っているのが校長先生で、今で言えば補欠授業ですが図画の時間に來られていました。先ほど話にありましたが、私たちは仮校舎にいまして、そこから浜の方を眺めた風景を描いた覚えがあるんですが、それを校長先生に褒められた記憶があります。それ以来、図画のコンクールがある場合は必ず描いて出品した覚えがあります。四年生の時には、同じく補欠授業で校長先生が習字の指導をなさつて、その時も「うまいね」と褒められ、その時の言葉が強く印象に残っています。今も昔も、褒めるといふことは、子供にとつての最大の教育だなどという感じがしております。やはり、校長先生だったので、そういう立場からの指導をなさつたのだと思います。

そんなふうに、一、二年時代は和やかな時代であつたと思いますが、三、四年生あたりから軍色の強い教育になってきたと思います。軍事教育として指導されたことで覚えているものが二つあります。一つは手旗信号で、体育の時間に手旗信号を覚えないとボンボンやられた。そんな経験があります。そして、明けても暮れても軍事教練で防空壕掘りや食料増産のために運動場を耕して芋を植えるとか、野山に行つてツワブキの茎を採つてきて食料の足しにするとか、先ほどもお話に出ましたが、馬草を刈つてきてそれを乾燥させて教室いっぱいに積んだりしました。軍色の強い時代に小学校六年生まで教えられたという経験があります。

その頃の遊びとして印象に残っているのは、近くのウツバマカ

ら取ってきたモーモーですよ。何も遊び道具のない時代ですからね。おはじきモーモーを拾ってきてポケットに突っ込んでいて、休み時間になるとモーモーアタラセーをした。そういう遊びが印象に残っていますね。他に、石蹴りだとか陣取りだとか、これは戦争につながる陣取りですね、それにマリ蹴り等、こういう遊びが中心だったと思います。今の子供達は与えられた道具を使って遊びますが、あの頃は道具がないですから自分たちで遊びを創り出し、考えて、友達と一緒に遊ぶという、そういうことで創造性が養われたんじゃないかと思っています。子供は遊びの天才というけれど、遊び道具が無いときには無いなりに工夫して育っていった、そんな時代であったというふうに思います。

司会 次に平良農勇先生、お願いします。

平良 私も同年代でありますので重複しないように、別なところから話してみたいと思います。先ほど、司会の方が国民学校になつてからかなり違ってきたんじゃないかというお話がありました。私達は三年の時に国民学校になったわけですが、一番変わったのは「国民総動員」という校舎前面の看板、あなたがたは少年団というんだと、これを頭にしっかりと植え付けられました。そんな時代ですから、小学校三年で剣道がありました。それ、剣には櫛棒で作られた重いものと軽いもので作られたものがあつて、剣道の時間になると軽いものを取るために一生懸命走りまわりました。しかも、私達が指導を受けたのはメンだけで、ただメン、メンで前に進むだけです。今考えると軍色が強かった時代で、心身の鍛練であつたのかなあと思います。



平良農勇

三年の終わり頃から四年、五年にかけて、校舎の修理だとか、話に出ています茅葺き屋の増設とかがありました。この校舎もフアーブルー屋根ですぐに茅をかけたただけのものでしたから、校舎の天上は私達のいい遊び場で「頭さわり」等よくやったものです。また、私達同級生は校舎の修理のために、石田のクラブという部落の集会場に移動させられました。そして最初の先生が平安山先生で次が安里先生でした。学校を離れての授業でしたが、正規の授業六時間をそっくりそのままやりました。平安山先生はそうでもなかったですが、安里先生は私達の様子をよく見ていました。今考えますと、先生は当時、私達に自治会活動を重視して指導されていたんだなと思います。清掃や後片付けがすべて完璧じゃあ





昭和33年（1958）頃の校舎（学校アルバム）

ないと翌日やらされていました。安里先生は、授業が終わって清掃の時間になると時には家に帰っていました。これもこの先生の方針ではなかったかと思えます。先生が下宿先の屋根の上に立ってタオルを振ると下校になるんですね。そして、級長が指揮をとって終わりの挨拶をして帰る。こういう具合で、喧嘩もよくしたんですが、非常に仲間意識が強くていい同級生だったんじゃないかと思えます。

もう一つ、私個人の思い出として強く残っているのが平安山先生で、先生は三中を卒業してきて私達の指導にあたっていました。非常にユニークな先生でした。当時私達の同級生は四十名を超えていました。これを東西に分けて大和相撲（江戸相撲）をやらされました。自分の上着を優勝旗にして、優勝した人にはこれをあげるということで三日ぐらいかけてやりました。私は小柄でしたが、優勝旗として先生から三中のボタンの付いた上着をもらい、とても印象に残っています。

それと話がとびとびになって申し分けませんが、先ほど慶典先生からお話があった電気の話ですが、私が教鞭をとり始めた時なんですが、やはり、ランプから電気に変った時のあの子供達の感激の様子は何とも言えなかつたですね。課外授業なんかで暗くなってもパッと明かりがつかますからね。私は暫く電気係をしていましたが、一番困ったのは本字への送電でしたね。台風なんかがあると線が切れるわけです。したら学校に文句がくるわけです。今のよう引き込み線は電柱ではなくて、電線をミカンの木やフク木に渡しているんです。これに登って治さなければな



りませんでした。ピリピリと体にきて困りました。それ以外は楽しい生活を送っていました。

**司会** 平良先生ありがとうございました。慶典先生からは主に学校づくり、大城先生、平良先生からは戦前の自らの学生時代の思い出、戦後、教育に携わってからの話を一部お話していただきました。先生方からのお話でも分かるように、戦後間もなくは子供達も勉強半分、学校づくり半分といろいろと体験をさせられた時代であります。そこで、上原朝明さんに当時の学校の様子や子供であったご自分の様子、学校づくりのことなどをお話していただきたいと思います。

**上原** 少し自分の記憶を辿ってみたいと思いますが、私たちが戦後、有銘の学校を再開した時というのは、全く無からのスタートだったと思います。残ったのはデイゴだけです。当時私は二年生か三年生になっていたかな、廃墟となった学校の後片付けのかわら授業をするという状況でした。最初は校舎もなく米軍の野営テントですね。この中で授業を受けるのですが夏になると暑くてたまらないんです。幸いにして、運動場を覆わんばかりの大きなデイゴがありましたので、東側は何年生、南側は何年生、西側は何年生、北側は何年生というふうにしてこの陰を利用して授業をした覚えがあります。もちろん机はありませんので、めいめい家からソーメンの箱をかついできて、そこらへんにある板ぎれやレンガのかけらをもつてきて腰掛けがわりにして授業を受けた記憶があります。もちろん、教科書やノートはありません。帳面の代わりに使ったのはセメント袋でした。どこどこで工事があるよ

というところ、セメント袋はないかと目をキョロキョロさせてこれを拾ってきて、適当に四角に切って帳面代わりにしていました。それが無いときは、座っている側の土に竹で書いたりと、そういうふうにして学校を再開したわけです。暫くして、PTA総動員で茅葺きの校舎を造ってもらったわけなんです。雨が降ると川でした(笑い)。特に今の体育館あたりにあつた茅葺き校舎が一番真つ先に浸水するところでした。膝小僧まで浸かって勉強した覚えがあります。それ以上になると授業ができないということも解散になりました。心配した父兄の出迎えで下校したという記憶があります。

そうこうしている内に、敷地が狭いということで、敷地を裏の方まで延ばしたわけです。延ばしたにはいいけれど、今みたいにケンチを積まれていないものだからすぐ土砂崩れで校舎が埋まってしまうました。幸いにして建物は崩れなかつたけれど、さあ、これから土をどうするかということになって、各学級の責任で自分たちの教室は自分たちの力で土出しをするということになりました。幸いにして、同級生の平良シンイチ君のところへ荷車があつて、これを借りて運ぼうということになって、最初は丁寧に積んで五、六名で押しているんですが、だんだん慣れるに従って積めるだけ積むんですよ、できるだけたくさん積んで早く片付ければ授業が早く再開できるということをやったんですが、あまりにも乗せ過ぎたものだから車が片方潰れてしまいました。その時、島袋先生に少しお灸をすえられたのですが、先生覚えていらっしやいますか(笑い)。車の方は、比嘉シンジヨウさんという現役

バリバリの大工さんに元どおりにしてもらって返した覚えがあります。

**司会** 石の校舎を造られた頃のお話ですか。

**上原** 石校舎はそれからずっと後のことです。石校舎の石は確か我々が五年の二学期頃から運び出したように思います。その時の石は、今のテラクの浜ですね、それこそ車で運んできてわざと積み上げたような、それほど石が豊富だったですね。最初の頃は放課後、一日一回、二人一組で行くというノルマでやったんですが、誰と組んだほうが有利かでいろいろありました。石は丸くて角がなくて慣れないものだから縛るのが大変でした。石を引つける道具があったんですが、これは上級生に全部カスめられて、



上原朝明

自分たちは慣れない手つきで石を縛って担いだ覚えがあります。そして、六年生の頃から石校舎の建設が始まったと思んですが、その頃になると一日二往復がノルマでした。鳥袋 あ頃は道ができていたかな。

**上原** 道はまだ工事中でしたが、こんなふうにして石校舎、初めての高級建物ができただけですが、この校舎には中学の二年、三年が入るわけです、二教室しかないものだから。造るには造ったが、いつになったら新校舎に入れるのかと非常に待ち遠しい思いをしました。石校舎には中学三年になってやっと入れるようになりしました。そして受験勉強が始まった頃は、先ほど又吉先生からもお話がありましたように、茅葺きの屋根裏で勉強して、授業がすんだら、サブランプといいましたかね、後ろに丸い反射板があるやつ、それを一人ひとり持参して寝泊まりました。今でも思い出に一つ持っているんですよ。しかし、よく火事を起こさなかったものだ、今でもヒヤヒヤするところがありますね。

**司会** 引き続きまして沼倉さんに、当時の学校の様子、服装とか運動会のこととか、勉強のこととか、子供の目から見た当時の様子をお話いただけますか。

**沼倉** 上原さんとはほんの二、三年の違いしかありませんが、相当な差があるように思います。ちよつと断片的なお話になるかと思いますが、特に印象に残っていることからお話してみたいと思います。

あれは確か上原亀吉校長先生の時でしたかね、学校の裏山をハッパをかけて壊したのはいいけど、土砂崩れで校舎が埋まってガ



ラスが壊れるんじゃないかと心配したことがあります。そして、その土砂をモッコで運び出して校庭に埋めていったものだから、校庭がだんだん高くなっていった、そんな記憶があります。それとデイゴの木ですけれど、戦後まであったのは覚えているんです。デイゴの花の下で遊んだ記憶がありますから。それがあある日、どういう形で撤去されたのか知りませんが、校庭の横に山積みになっていました。いつ、どういう事で撤去されたのか知りたいなと思います。また、学校の側にあつた私の家のことですが、戦争で焼けてしまいました、その後学校を再建する時に二〇〇坪ぐらいの学校に取られたんじゃないかということです。私の所だけではなく、今、体育館のある所はナガモトだったとかナカミネだったとか、そんな話も聞いています。有銘校の敷地が広がったことに貢献した人達が結構いらっしゃるようで、できたらそのことも調べていただきたいなと思います。私の記憶の中には当時の家のことが残っているものですから、個人的にも知りたいなと思っています。

学校のことでは印象深いことと言えば、担任の先生が自分たちの兄さん、姉さんというケースが多かったということ。例えば、平良晨勇先生の妹が私の同級生、石川元康先生の妹も私の同級生、そして私の姉、具志堅ミチコも四年生の時の担任でした。兄弟だけれど先生であつて、生徒であつたという、そういう関係が多かつたのはとても良かったと思います。何故そうなるかと言えば、有銘校出身の方が教師となつて有銘校に戻つて来られるからで、先ほど、寝泊まりの受験勉強のお話が出ていましたが、それはそ

ういう先生方が地域に住んでいたからできたことではなかったか  
と思うわけです。有銘まで通っていたら交通の便もあってなかなか  
かできなかったんじゃないかと思えます。校長先生もほとんど  
地域に残っていましたね、家族連れで。その子供達と仲良く  
ったり、転勤してもやりとりを続けたという記憶があります。古  
き良き時代の懐かしい思い出です。私がブラジルから帰ってきた  
時には、地元出身の先生はほとんどいらっしやらなくて、平良晨  
勇先生が教頭先生でいらっしやったぐらいで、あとはみんな知ら  
ない方ばかりでした。何か時代の流れというものを感ぜました。

個人的には珠算の練習の思い出があります。佐久本清実先生と  
石川元康先生が中心になって猛特訓をしたという記憶があります。  
珠算の選手権があつて、特定の生徒だけ特訓をしてもらつて、  
私もその一人ですけど、今、あの時の特訓が仕事やいろんなこと  
に役立つています。

それから運動会も印象的でしたね。私たちが小さい時は、マ  
ーチングやなにかを先輩たちが全て草笛でやっていましたね。ハ  
ーモニカがあつたかどうかといった時代です。草笛で子供達が行  
進していたと記憶しているんですが、間違いないでしょうね。レ  
コードも何も無い。マイクはラッパみたいなものがあつてそれが  
スピーカーにもなつていて、上級生たちがそのマイクに向かつて  
草笛を鳴らして、行進したり遊技をしたりしていました。女子生  
徒のフォークダンスでは、うちの姉が音楽を見ていたんですが、  
自分の声で歌つて、それに男子生徒が草笛で伴奏をして遊技させ  
たという記憶があります。他にもいろいろありますが、これぐら

いにしておきます。

司会 ありがとうございます。戦後の学校づくりや学校の様  
子をお話していただきましたが、もう少しお話していただきたい  
のですが、その当時、子供達の勉強に必要であつた教科書はどん  
なふうでしたか。

又吉 算数、理科、英語はだいたいB5の半分のテキストだつ  
たですね。ちゃんと印刷されたものでした。

司会 それはいつ頃ですか。

又吉 昭和二十四〜二十五年だったかな。

上原 教科書らしきものを使ったのは六年生頃だと覚えておる  
んですが。

沼倉 小学校五、六年頃じゃあなかったかしら。「さくら、さ  
くら」というのがガリ版刷であつたような記憶がありますけど。

司会 戦後間もなくは小学校にも英語の学習があつて、英語の  
教科書もありましたすよね。

平良 又吉先生がおっしゃっていたような大きさでした。

又吉 理科だけでも六冊ぐらいあつた。私は数学だったけれど  
一冊しかなかった。

上原 理科関係のものが何冊ありました。我々が受験勉強に  
入った時に、島袋先生が集めて来られたんですね、七、八冊ぐ  
らいを一冊に綴つたものを持たされて、勉強しなさいと言われた  
のを覚えています。

司会 今こうして記憶を辿っていますが、なかなか正確に思い  
出せない部分がありますね。まあ、こうしてお話をしていくうち



沼倉 佐智子

に自然に蘇ってくるかもしれません。大城先生。戦後の学校の様子についてもう少し付け加えるようなことがありましたらお話ししてください。

大城 先ほども少しお話に出たんですが、私は一九五一年の九月に有銘小学校に勤務いたしましたので、その辺りのことをちょっと振り返ってみたいと思います。当時、有銘小学校には特訓する事項が二つありました。一つは先ほど沼倉さんがおっしゃっていた珠算の特訓、もう一つは慶典先生がおっしゃっていた進学指導、受験指導の特訓でした。珠算については、代表選手を学校に集めて夜遅くまで指導していました。そして、辺土名地区の大会に出場してたびたび優勝をしていました。それから受験の特訓で

すが、受験希望者を集めて全教員による夜間までの特設授業を実施していました。そのおかげで合格率は100%でした。子ども達の努力はましろん、教師や父母の教育に対する熱意の賜物であったと思います。

それから戦前のことで一つ加えさせていたいただきたいものがあるんです。晨勇先生からもお話がありました。あの頃、有銘校は江戸相撲が非常に盛んで地区の代表、国頭郡の代表として県までいきました。指導は会長の島袋先生だったと思います。晨勇先生は体が小さかったけれど技能派でとてもうまかった。このように、戦前からスポーツに対する競技力というのでしょうか、非常に高かったように思います。島袋先生が指導した子供達が郡で優勝して県の大会、奥武山でありましたが、出場した経験があります。仲泊栄吉さん、伊良波朝幸さん、亡くなった城間松三さん、そのような方々でした。私も小学校の補欠で行った覚えがあります。非常にスポーツが盛んでした。

それから戦後、教師と父兄との関係で印象に残っているのは、お正月に校長、教頭は朝から部落廻りでしたよね。残った先生は授業です。このようなことで父兄との交わりがあったんだろうなと思います。教師と子供達との関係も、今のようないきなりギスギスした関係ではなくて、非常にゆとりのある子弟関係であったと思います。と言いますのも、私は主に五、六年生をもったんですが、授業が終わった放課後、一つしかないボールをもって運動場で五時間までドッジボールをしたり、子供達とのふれあいがあったり、深まっていたような印象があります。今のようには、先生方が忙しくて追い回



されているようなことがなくて、子供達とのふれあいが充分にも  
てる、ゆとりある教育ができていたんじゃないかと思えます、  
終戦後間もなくのことですけど。

私の授業に関しても、私は声が大きかったものですから、校長  
先生に「君の今日の授業は職員室にいても充分受けられるような  
元気な声でしたよ」と皮肉を言われたことがあります、決して  
叱られるようなことはありませんでした。本当は「もう少し声を  
小さくして子供達を疲れさせないように落ち着いてやりなさい」  
と言いたかったはず。このように、教育を充分に受けていな  
いものが教員になって教壇に立っているものですからこのよう  
なことがあります。それにしても、子供達との繋がりとこののは  
確かに今よりは深かったなと思います。家庭訪問で各家庭を廻っ  
ていくうちに何を話していいのかわからないぐらいに酔っ払っ  
て、翌日学校に行くと、「先生きのうはうんと飲みましたね」と  
子供達にからかわれるような状態がありました。それだけ父兄や  
子供達が先生を信頼していたんだらうと思います。先生が酒を飲  
んでも、これは当たり前だと、父兄も子供もそのように受け止め  
ていたのではないのでしょうか。

沼倉 介抱した記憶があります（笑い）。でも、先生方、みな  
さん立派でしたよ。

司会 今、大城先生から、課外授業で先生の手当を父兄が工面  
したとか、教師と父兄との一体感があつたというようなお話が出  
てまいりました。そこで、昭和三十三年、四十四年の長きにわた  
りPTA会長をされてこられた先輩の饒波正行さんに、子供を持

っていらつしゃつた親としてお話をいただけたらと思います。

饒波 自分でもちよつと長かつたんじゃないかと思つており  
ます。なぜ、私が長かつたかと言いますと、あの頃は沖縄本島内  
と言つても有銘は離島の学校みたいなものですから、当時、私は  
商売でダージーというアメリカ車を有銘で最初に手に入れていま  
したから、学校の生徒が塩屋に行ったり喜如嘉に行ったり、運動  
会やバレーボール大会という時に利用できるから、饒波正行をし  
ばらくPTAの会長においておかなければならない、そういうこ  
とではなかつたかなと思つております（笑い）。それでも、子供  
達や父兄の方々に頼りにされ、信頼されていきましたので大変幸福  
だつたなと思つております。子供達もいろんな大会でいつも優勝  
しておりましたのでうれしかったですね。一番上の子から一番下  
の子が終わるまでPTA会長をやつた記憶があります。今思い返  
すと大変幸せな時代であつたと、みなさんに非常に感謝しており  
ます。

島袋 戦後変わったことと言いますと、電気の方は先ほど出て  
いましたが、もう一つに水道がありました。水道の材料のアルミ  
パイプも郷里の郷友会の方々がただでくれてありましたので、テ  
ラクまでも引つ張りました。パイプは那覇の資材集積所にあつた  
ものですから、福地又で薪の運搬をやつていた比嘉カマトクさん  
のトラックを使って運びました。また、ある時は仲本コウメイさ  
んと言いましたか、あの方が天仁屋あたりまで運んだり、運んで  
来て降ろしたものを生徒を連れて担ぎに行つたりしたことがあり  
ます。みんな喜んで手伝つてくれました。郷友会の方々も関心を



もっていただいで、資材もたくさん集まりました。それで遊具を作ったこともあります。とにかくみんなの力で戦後の学校は作ってもらいました。

校地については、本字のほとんどが空襲で焼けてしまいました。が、区民や地主の方々の教育に対する理解と協力により、戦前の倍以上に広く確保することができました。改めて知主の方々に感謝申し上げます。

**司会** 鳥袋先生から終戦直後の学校づくりの一環としての敷地の確保、その他のお話がありました。が、電気や水道のことも含めまして本当に当時のみなさんはご苦労なさったんじゃないかと思えます。それと先ほどの話に戻りますが、先生方とPTAの協力もあつたのではと推測するわけです。話が少しそれますが、このたび、饒波正行さんのお孫さんの吉本久也さんがアトラントのオリンピックに出場することになっております。個人競技では沖繩からはただ一人です。十年間PTA会長をされた甲斐があつたのでは思います。饒波さんおめでとうございます。

さて、戦後の学校づくり、学校生活の中でもう一つ忘れてはならないものがあります。今は、これを子供達の情操教育あるいは学校生活・教育の中に取り入れなければならないということ。復活しつつあります。戦前もそうでしたが、農場による生産活動が教育の大きな部分を占めていたわけですね。そのことについて、先生方を代表して平良先生にお話してもらいましょうか。学校における農業ですね。戦前、農場を取り入れたときの状況、戦後なくなるまでの学校教育における位置づけなど、分かる範囲で結構

です。お願いいたします。

**平良** 私が教員として働いて間もなく、これは県の施策というよりも国の施策でもあつたらうと思えますが、農休日という制度があつて、各学校とも一年間で二十日は取り入れるようにということがありました。本校も暫くそれを続けたことがあります。農休日は今の公休日みたいな感じで完全に授業を休んで農業に従事するということでした。ただし、その農休日は農繁期にのみ活用のできる休みでした。あの頃の生徒は、前にも話にありましたが、ほとんど家の手伝いをしているわけです。ですから、どの生徒も農業の心得があるわけです。現在のご父兄の方々に、鎌を使えない、鍬さえ使えないという方がいるんですね。道具を使いきれないものだから、目の前にあるやれることもできないというのが今あるんですが、あの頃は誰もがやれましたのでうまくできたんじゃないかと思えます。本校では上原亀吉先生がそういう生産活動に非常に熱心でした。

電気を設置して映写会を催し、地域の方々に文化を享受してもらうと同時に利益を挙げ、また、学校前の田んぼでイグサを生産して、学校の向かいの畑を購入しました。また、俗に「ンチャの原」(今の新道路)といわれていた段々畑でも生産活動を行っていました。労働する喜びの思い出として今も心に残っているのが、子どもたちの修学旅行や記念アルバム作りです。父兄に負担をさせず、自分たちの手で費用を捻出しようということで私も一緒に田んぼを耕しました。

そのうち、部落の方々も生徒がそういうことをするのなら、

我々も協力しようということで、田んぼを耕して欲しいという依頼がくるようになりました。生徒四十名ぐらいが並んで耕すわけですから、いっぺんにかんりの広さの田んぼを耕せましたよ。そういうことで、旅行の費用、記念アルバム代は父兄に負担がかからないようにと、子供達自身で稼いでいまして、同年代の子どもたちが喜んで汗を流し、助けたり助けられたりして働くという、非常にいいシステムではなかったかと思えます。今は機械化の時代だとか言っていますが、すべてを機械化するわけにはいかないわけで、鎌や鍬など身の回りにある農具ぐらいは使いこなせるようになりたいものです。

幸いにして有銘校が農場を復活して四カ年ぐらいになると聞いております。泥まみれになつて働くことによつて食生活を守ることがどんな難しいものであるかある程度知ることができるとし、労働も、働くということがこんなに嬉しいものかと収穫期には必ず感じるはずだし、こういうことはやはり続けて欲しいなと思えます。

**司会** その当時、今でしたら教育上とても考えられないのですが、例えば自分たちで豚を養つて、大事に育てて一年の収穫祭の時に豚を殺して、これでクファージュシーを作つて生徒全部で食べたというようなこともあるわけですね。自分たちの食生活の一部になるんだということでも大事に育てた。当時としては当然のことでしたが、今は多分そういうことは考えられないと思えます。当時は生産活動という教育の一環として行われていたことです。が、身近な自分の生活の中で、家庭でやっているようなことを学

校でもそのままやっていたということですね。

**沼倉** 茶園もありましたよね。袋担いで大湿帯まで行つて持ち帰った記憶があります。

**平良** 茶園は烏袋先生の所を貸していただいて、中学校で肥培、管理することになり、荒れた茶園を手入れして収穫を得るまでになりました。根から切り取り（台刈）、焼いて芽を出させることも初めて知るなど非常に勉強になったんじゃないですかね。とにかくあの頃は、その他にも学校で山羊や豚を養つていまして、山羊小屋は宿直室の隣にありましたから、宿直の朝になると山羊がペーと顔を出すわけです。それに起こされたエピソードもあります（笑い）。

**司会** これで一部二部を終わりました、第三部に移らせていただきますが、三部はテーマを決めないでフリートランキングで思い出話をしていただきたいと思います。

## 戦後の学校生活

**島袋** 先ほど沼倉さんからお話のあったハッパかけのことだけども、今は真つすぐになつていますが、当時は岩があつて敷地もそれほど広くなかつた。そこへハッパをかけたらドサッと土が落ちてきて茅葺き校舎が潰れてしまいました。それで真ん中辺を真つすぐに切つて上等になつたと思つていたら、今度は雨が降つて土がドサッと滑つてきて大変でした（笑い）。それで、これを片付けるために北部土木事務所からクレーンを持ってきたら今度は橋が折れて川に落ちるといふことがありました。

**平良** しかし、そのご苦労のお蔭で校舎が真つすぐになりました。

**司会** 戦前からの子供の数の推移はどうでしたか。

**島袋** 終戦直後は四百名ぐらいだったかな。

**司会** 私たちが昭和十四年生まれで、戦後の新生の小学生第一号なんです。昭和二十年の八月に戦争が終わつて、翌年の二十一年の四月が戦後の第一号入学生です。朝明さんは昭和十一年生まれですので、戦前の教育を受けられてたのでないですか。

**上原** その当時は、私は東小学校でした。当時は各学校に配属将校が来ていました。で、その将校が一〇・一〇空襲の時にそこらへんの船がボンボンやられた時に、海岸まで走つていって見学しているものだから、僕らも走つていって見学してたんですよ。



そしたらその内に機関銃がパーライナイ始まったものだから、慌てて引き返しました。おそらく半時間ぐらいだろうと思いますけど、どこをどう走ったか覚えてないですね。もう、あれつきりチャーヒンギーですよ（笑い）。

又吉 生徒だけで農具小屋を作ったことがありますよ。二年か三年の時でした。今の校舎の後ろ側に三間に一間半ぐらいの本建築です。大工を全然使いませんでした。

司会 当時、コンクリートはありましたか。

又吉 コンクリートじゃあなくて木造瓦葺きで島瓦を乗せたものでした。私が中心になってやったんですが、最後の仕上げの時に瓦を乗せていくわけですが、棟を造る時に長い方と短いほう逆にしたみたいで、どう乗せていいか分からなくなりまして、適当にやれやーと言ってやったら、宮城リョウゲンさんが来て「これはチガットサー」と言った記憶がありますけど、木造瓦葺きの小屋を生徒だけで造ったことがあります。瓦葺きは簡単にできそうに見えるが、実際に造ってみるとなかなか大変でした。

それと、四百名ぐらいの在籍だったら、今でも本当に復活してもらいたいものがあるんですよ。運動会のマキボウ、棒術です。あれは有銘校の伝統でしたから、運動会には必ずマキボウをやつて、最後は慶佐次も呼んで横隊になって型にはまったものをやりましたけどね。

司会 棒は、私たちがやる頃までは全部自分たちで作っていましたね。湯飲みのかげらで最後の仕上げをやっていました。

上原 自分の体よりは五寸は長くと。



又吉 マキボウだったら、小学校一、二年生でもできると思います。型さえしっかり覚えれば。

上原 慶佐次に棒のうまい人がいましたよ。古堅さんでしたかね。誰だったか、三年の時に三尺棒習って来いと言われて一週間通ったことがあります。

島袋 あの頃までは年寄りの家に行くと、樫の木で作った棒が必ずありました。

大城 さつき車の話が出ていましたが、正行さん、今の一心療護園あたりでタイヤを海に吹き飛ばしたこと覚えていますか。冬、子供達を塩屋まで乗せていった時です。

饒波 左側のタイヤが飛んだんです。あの時は右側通行だったかな。今のライトバンみたいな車で人を多く乗せ過ぎたものだから、海に十メートルぐらい飛んでいきました。右側通行だったから大きな事故にならなかったように思います。

大城 あの時乗っていたのは六年生ですよ。六年生全員が乗っていました。四十名ぐらい乗っていたんじゃないかな。

司会 車の話が出たので思い出したのですが、修学旅行にも車を使いましたよね。修学旅行については先ほどお話にありましたように田圃を耕して費用を捻出していました。私は体が弱くて三分の一しか小学校へ通ってなくて、費用は同級生に稼いでもらって行ったのですが、確かその時に、JMCに幌を着けて南部修学旅行をしたような記憶があるんですが、あの時の車はこの車だったのでしょうか。

平良 あの時の車は慶佐次の方ではなかったかな。

司会 仲村太郎さん。

平良 あの方が幌をかけると大丈夫というので、それだったらいいだろうということ旅行に使ったんです。

上原 那覇というのは初めて行くんですよ。名護までは何回か行っているんですけど、那覇は行ったことがないんですよ。楚辺の通信所を見学して向こうで降ろされて、三時に安里三差路に集合というような内容でした。

司会 あの当時は宮城旅館というところに泊まりましたよ。

平良 学年によつては浮島ホテル。

島袋 最初は安里にあった婦人会館だったかな。

上原 今の那覇のオリオン会館の横にある浮島ですか、向こうに泊まりましたよ。

平良 他の所は学生は泊めなかったですよ。

司会 先ほどの生産活動、生産学習の中で、島袋先生の茶園の話も出ていましたが、学校に杉山があったと聞いているんですが、どこにあつて、いつ頃まで管理していたのですか。

島袋 ウーサク橋の上にあつた杉山は戦後伐採されている。慶佐次の砂防ダムの左側にもありました。フクジマタから通つて杉を植えたんだが。

上原 杉山は我々からは記憶にないですね。

饒波 僕らが五年生の頃ですね。

平良 ウーサク橋の右側は覚えていません。

島袋 皇紀二六〇〇年の記念に松造林をしたことがあります。

饒波 あれは父兄五日です。慶佐次の部落の川沿いに大きいの



があります。

**又吉** あれは四年生以上みんな動員してやったんじゃないかな。

**島袋** 松はあまり成長していませんね。

**平良** みなさんの話を聞いていると、あれこれと思ひ出すんですが、一人ではとても思ひ出しきれませんね。

**司会** 百周年を迎えてこうして座談会をしていただいているわけですが、本当に百年の間に教育は様変わりしたなと思ひますね。もちろん、戦争を境にしてだろうと思ひますが、この様変わりの有り様を説明するとなると、どのようなことが言えますかね。今、子供達にこういう昔の話をしますと「何を言っているのか」と、理解の範囲を超えてる部分がたくさんあるわけです。おじいちゃん、おばあちゃんはおとぎの国の話をしていると。我が母校・有銘が天銘小学校として明治二十八年に創立されてから百年、この長い歴史の中で本当にこれこそ大変化だったなと言えりようなことがありますでしょうか。

**又吉** 結局、やはり経済成長ですよ。時代の流れがそうなつてきている。僕らが小さい頃は、沖縄県全体でもタクシーが六台ぐらいしかなかった覚えがあります。マルサンタクシーというのを覚えていますが。バス会社も新垣バス一社しかなかったですね。道路もよくなったのは戦後ですね。

**饒波** 戦前の沖縄は植民地政策をとられていたんじゃないですか。県でも、課長以上は本土の人でないといけないとか、台湾みたいに植民地政策をとられていたわけですよ。





上原 沖縄は国内だから継子扱いみたいな感じで、植民地政策

の予算は全部台湾に取られているんですよ。今台湾に行ってみますと当時の水利事業とか松造林事業がいかによかったかが分かります。日本の国は台湾にはやるべきことはやったわけです。水利事業なんか、事業を起こしたのは台湾総督府になっていますが、設計、施工をやったのは日本人です。銅像がありますからね。

沼倉 スポーツだけではなくて部落対抗で学校の成績も競争しましたね。部落ごとに全学年の子供達の点数を合計したりして。

饒波 博先生が青年会長時代に村の競技を有銘にもってきかたがありましたよね。それで一位になりました。

島袋 あなたが青年会長時代に、私が区長時代だった時に村の陸上競技大会を有銘に持ってきて、有銘が一位になったことがあつた。それまではなかなか一位になれなかつた。戦前は有銘と高江が争っていて三位には八点ぐらい差があつた。その後は有銘と川田が争つて、有銘が一位になった場合は川田が二位、川田が一位になった場合は有銘が二位、三位には六点ぐらいの差があつた。又吉 これは時々話に出るんですが、一時期、有銘校出身の校長、教頭が六、七名いることがありました。こんな小さな学校から七名というのは考えられないことです。当時、沖縄全県で小学校が一〇六校ぐらいあつたかな。一般的にみて各学校か一人づつ出るのが普通です。有銘からは七名もいるわけです。それが三九年、四カ年続いたですかね。

島袋 教育長に話したらびっくりしていました。

司会 学校は小さいけれど優秀な人材がいっぱい出ています

ね。

又吉 地域の学校に対する協力体制もしっかりしていましたから。今もそうなんですが、有銘は教師の人事異動上の僻地になっています。教師は三カ年の僻地経験がないと管理職の試験を受けられないんです。必要条件になっているものだから、一番狙われたのがここなんです。離島だと不便でしょう、ここは不便と言っても本島内です。でも、隣の川田は僻地には入らないんです。当時、有銘は交通が不便でしたからね。ちょうど私が教育事務所にいるころに決まりました。そしたら優秀な連中が殺到したわけです。それも大きな力になったんじゃないかと思えます。

司会 今でも東大に入学するよりも有銘校に赴任するほうが難しい。

大城 先ほど饒波さんから村の陸上競技大会を有銘に持ってきただというお話がありました。それまではいつも川田でやつていたんですよ。有銘の一番の問題は運動場が狭いことでした。二百mトラックも完全に取れないような所で運営できるかと。それで、何とか運営できるようにと区の方も学校もみんな力を合わせてわずか五センチでも十センチでもという気持ちで拡張してやつたような覚えがあります。それでも、やはりスムーズな運営は無理だということ、二百mトラックもセパレートではなくてオーブンにしました。他にも槍投げがあるし、円盤投げがあるし、投てきの種目の時には非常に危険を感じながら運営をした記憶があります。

司会 学校の敷地を広げていくのと、天然記念物にまでなつた

デイゴを切り倒さなければなかつたいきさつというのは。

**鳥袋** 焼けたんです。空襲で校舎が焼けて、その側にあつたデイゴも焼けて枯れてしまつたんです。

**司会** 私たちが小学校四、五年の頃だつたと思うのですが、一つはロープをかけて倒した記憶があります。

**上原** 真ん中にあつたのは我々が五年の時の台風で倒れたのではなかつたですかね。

**饒波** 台風と言えば、台風で倒れた大きなガジュマル、今あるとしたら名護のヒンブンガジュマルよりも大きかつただろうと思われるガジュマルがありましたよ。

**鳥袋** 当時でも今のヒンブンガジュマルよりも大きかつた。あれの十倍以上はあつた。

**大城** あれは戦後もだいぶ後まで残っていたはずですよ。

**饒波** 駐在所の所にも大きなガジュマルがあつた。あれも台風で折れて駐在所を潰してしまつた。その台風の日に、駐在所の調査の奥さんが石垣校舎で子供を生んであつた。ナカバシルを斜めにしてそこで子供を生ませたと。巡査は子供の番をしていて、その頃私は区長でしたから、そのボサツを全部公民館に運んで車で塩屋だつたかな。その頃の金一封と賞状をもらいました。

**平良** あのカジュマルもヒンブンガジュマルのように管理する人がいたらよかつたんですね。大きくなりすぎて重みを支えきれなかつた。

**又吉** 話は別ですけど、水泳教室、この写真を見て思い出したのですが、建国記念日だつたかな、何かの記念日に慶佐次の伝馬

船を全部動員して、それに有銘校の生徒を全部乗せてスクバママで運んだ覚えがあります。

**又吉** 海軍記念日だつたかもしれませんが。いきは良かつたんですが帰りが大変でした。子どもたちが乗っている時は子どもたちの手が權になりましたが、帰りは一隻に二人だけしか乗っていないので、東風になるともう漕ぐのにヘトヘトになるわけです。六年生でしたからね。高等科生が櫓を漕いでいました。

**司会** まだまだお話しは尽きませんが、こちらへんでそろそろ締めたいと思います。記念すべき百周年の座談会ですので、大変すばらしいお話になるんじゃないかということで、世話役として期待をしておりましたが、全くその通りですね。一人ひとり



比 嘉 辰 雄

はなかなか呼び起こせない記憶もこのようにみなさんにお集まり  
いただいてお話する中で、勉学の様子、学校の様子、戦前戦後の  
教育の流れ、地域との関わりとかを、一つ一つ記憶の中から呼び  
戻していただき、すばらしいお話をしていただきました。誠にあ  
りがとうございました。また、今日この座談会に参加できなかつ  
た方々にも思い出話の原稿を依頼しておりますので、座談会と併  
せて記念誌に収録させていただきます。きっと、すばらしい記念  
誌になるものと思います。本日は長時間にわたり誠に有り難うご  
ざいました。



## 二、新里義雄先生 我が母校の思い出を語る。

本編は、平成八年七月十三日に那覇市三原の新里義雄さんの自宅において、インタビューしたものです。

聞き手 比嘉辰雄（期成会副会長）

島袋徳盛（期成会会長）

話し手 新里義雄 第十四代校長

（明治三十八年生まれ、九十三歳）

**司会** 本日は、新里義雄先生に昭和十年九月から昭和十六年まで有銘小学校で教鞭をとっておられた当時の戦前の学校の思い出、また、昭和二十年十月から琉球政府入りするまでの昭和二十二年三月まで、第十四代有銘小学校長として戦後の学校づくりにも携わっていらつしやいますので、その当時の学校生活等についてお話を伺いたいと思います。

今日のお話しは、百周年記念誌の中に収録させていただきますので、ざつくばらんにお話いただきたいと思えます。

では、初めに新里義雄先生がお生まれになりました、明治三十八年頃からの、その当時の時代の様子、それから天銘小学校が開設された当時の様子等がお判りでしたら、お話しをお願い致します。

**新里** 私は久志村の瀬嵩生まれだから、明治三十八年三月八日



に瀬嵩七番地で生まれました。だからクワームヤー（子守）として、ハンバタのおばさんが来ました。その後、又吉慶典さんのお父さん、又吉山一郎さんが生まれたものだから、彼をおぶっておばさんは瀬

嵩から通って慶佐次に来た訳です。

そういう状況だから、結局、明治三十八年に生まれて物覚ええついた頃の瀬嵩の様子はわかるけども、慶佐次や有銘の状況はわかりません。

**司会** 慶佐次、瀬嵩の状況ではなくて、その当時の時代の様子を新里さんが物心ついた頃、明治の終わり頃、小学校に入学された当時の様子でもお聞かせ願います。

**新里** 私が記憶に残っているのは、小学校に入学してカーギヤ一小に入った頃の状況しかわからないが、その後の状況は……  
**司会** その当時、その時代の人たちは皆どのような生活をなさっていましたか？

新里 洋服もないし、裸足です。だからお昼は芋をティーサージ（手拭い）でくくってそのまま持って行きました。

島袋 仕事は山へ行つて、薪を取つたりの仕事が多かつた訳ですね。

新里 それはないでしたね。

司会 新里のおじいさん一人の体験ではなくて、部落全体の様子でも？

新里 私は親父が瀬嵩にいたもんで、若い頃にそこを出入りした頃に那覇を行つたり来たりしたから、ちよつと鳥の状況は思い出せないなあ？

島袋 新里のおじいさんは役場におられたのですか？

新里 最初は久志の郵便局に勤めて、それから役場に勤め、それから県の事務所の事務関係の仕事をしました。

司会 新里のおじいさんは先程の話して、天銘小学校の校名の由来とか当時のお話しなど、少しお聞かせ願えませんか、新里さんの聞いている範囲でよろしいです。

新里 そうではないかなーと、聞いているのですが実際問題としてわかっているのは、天銘尋常小学校からです。平良の学校名はわからないけど、平良の学校に慶佐次の子供も皆通つていたものだから、その関係で天仁屋の天と有銘の銘をとつて、天銘という学校が出来たのではないかなあと思っている訳ですが事實はよくわかりません。

島袋 慶佐次の人も平良の学校に通つていた人もいた訳ですね。

新里 皆そうですね。

島袋 尋常科は平良ですね。

おばさん 平良には学校がなかったのでは、川田にあったのでは？

新里 最初は平良から、学校制度が出来たものだから平良の学校がなくなつて川田に学校ができた。

司会 新里のおじいさんは有銘小学校にはいつの頃ですか？

新里 有銘小学校には、大正元年か明治四十五年頃かなー。

司会 新里のおじいさんが学校に通つてい頃の学校の様子をお聞かせ下さい。

新里 運動場には大きなデイゴの木が四本あつて、一つは東側の元の便所があつた所の近くに、それから一つは校門から入つた所で、これはとつても大きかつたからね。我々は体が小さいでしょう。随分あの木が大きかつたです。生徒がびっくりする位大きかつたです。

司会 その頃、学校に通つていた生徒ほどの位いましたか、また、その当時は総ての家庭からは学校に通えなかつたようですが、慶佐次はどうでしたか。

新里 慶佐次はすくなかつたが、有銘は多かつた。

司会 その当時は天仁屋からも子供たちは通つていたんですか。

新里 そうです、一日中かかつて……。

司会 その当時から、大湿帯からですね。

新里 大湿帯と本当の区域ではないのだが、羽地村から久志村

に委託していた。全てに六十〜七十人位いて、一人当たりいくらというお金を支払って。

**司会** 天仁屋の子供たちが、学校の区域が別々になって有銘の小学校に通わなくなったのはいつごろか覚えていますか。

**新里** 有銘の学校から、天仁屋の学校に生徒が移ったのは、大正十二年の分村の時と記憶しています。その時は有銘尋常高等小学校です。

**司会** 大正十二年までは有津、天仁屋からもずって通って居たわけですね、

**新里** そうです。天仁屋の分教所が出来て、一年から四年生位までは、天仁屋に通い、有津はそのままずつと有銘に通っていたようだ。

**島袋** 分村して後も高等科は天仁屋になかったので、嘉陽まで行かなければならなかった。戦争中も有津からは高等科（具志堅均先生）もずつとそこから平良に通っていた訳です。

**司会** その当時の学校の様子をお伺いしましたけど、皆が勉強する状態とか、着ていた服装とか、お米も少ない時代の中で学校に持っていった弁当のこととか、子供たちの様子などお聞かせ下さい。

**新里** 本はフロシキに包んで担いでいた。女の方は後ろから……；弁当は芋で三つか四つ位をティーサージにくくってもっていった。

**司会** じゃあ、その頃の子供たちの教科書はどういうものでしたか？

**新里** 私は完全に揃っていたよ、教科書は国定教科書ですよ（国が揃えた教科書）です。

**島袋** 新里のおじいさんなどは、「ハナ」「ハト」ではなくて「ハト」「ハタ」ですか？

**新里** これは一番早い筈ですよ、「ハタ」「タコ」  
**島袋** 私は、「ハナ」「ハト」「マメ」「マス」だったかな



**司会** その後は、てふてふになったのですか？「ちようちようが「てふてふ」に。

**新里** サクラサクラ、サイタサイタ、サクラがサイタ。私の時代はハタ・タコ・コマ・ハト・マメ・コトリ・タマゴ・ハカマ・



ハオリ・アメ・カサ・カラカサ・ウシのツノ・シカのツノ・ツル・イケにフネ・フネにホ・ホバシラにハタなんだけどね、

司会 そうしますと今度は、子供たちに教えていた先生の姿と  
かの状況はどうでしたか？

新里 あの時代の先生は怖いですよ、非常に厳しかった……

司会 非常に先生は尊敬もされていた筈ですからね

島袋 女の先生はほとんど着物で袴の服装でしたよ

新里 その当時、女の洋服はなかったですよ、着物と袴で男の先生は洋服で詰襟。

司会 それから分村して天銘から有銘尋常高等小学校に変わりそれから昭和十六年には有銘国民学校にかわりましたね。その当時の尋常高等学校から国民学校に変わっていった時代の様子、また学校の様子などはいかかでしたか

新里 先程お話したように、私は久志村の瀬嵩で生まれていて、外に出ているのでおまり詳しいことは知らない……

司会 新里のおじいさんは戦争で丁度、有銘の小学校も戦災を受けて焼かれていたと思いますが、その当時は慶佐次の方にはいらつしやらなかったですか？

新里 その当時は居ましたよ、それから旧名護市役所前の「動員所」という所に行きました。

司会 以前、職業安定所のあった場所でしょうか

新里 「動員所」は、いろんな長期徴用とか、飛行場をつくる場合に人夫を割当して、教員からも……規則がかわったでしょう。



昭和16年当時の国頭国民職業動員所にて (写真提供 新里義雄)

国民徴用札という、総動員の……小学校の時非常に関係が深くな

つたものだから、小学校に行く……。

今から考えると、国民総動員法による大政翼賛会というのがありまして、講習の場合も誰も知った人がいないけど、有銘校からは私がいったでしょう。

沖繩から十名居たから、その十名のうちから大将がいた、それから宮崎県に……。九州各県から集まった百名位いて、それを四つに分けて四分隊長を私がやった。その時から変だなあと思っていたら、帰ってきて……。

**司会** 新里のおじいさんは何年頃から有銘の学校で教鞭を執りましたか？

**新里** 有銘は昭和十年九月からです。

**司会** そうしますと、丁度校長になられるまで、教鞭を執っていらつしやいましたから、今言う戦争の国民騒動の時も学校では当ても教鞭を執っていらつしやった訳ですね。

**島袋** 名護の動員所に行かれたのは昭和十八年頃ですか？

**新里** いや、昭和十六年です。

**島袋** 昭和十六年に学校を辞められて「動員所長」をしておられた。だから、健さんなども名護の学校に通っていたわけですね。

**司会** 本当に今度の第二次大戦では、子供から全ての沖繩の人が大変な苦勞をしていたわけですけど、戦後、昭和二十年の十月から二十二年三月に琉球政府に就職するまで、有銘小学校の第十四代校長として再び、戦後の学校づくりに苦勞されたと思います。その当時の校舎も焼けて子供たちの勉強する所もない、そういう

廢墟の中から有銘小学校を再建された、当時の様子を少しお話し下さい。

**新里** 十一月に羽地村田井等の收容所から移されて島に帰つてよろしいということで移された。新里のおじいさんは変な道を歩いているんだな。……戦争の時は山から出されて、收容所に入られて、收容所を卒業したら、真喜屋の小学校の校長になった。そこには、元々の校長先生も二人居たが、校長も二人居るのに新里先生も校長で入れるか、いや二人は校長じゃない校長は死んだといつて、アメリカ人に押しつけられたんだよ。結局、校長先生をしてる時に配給手当てだけで何も出来ない。例えば、チョコレートを集めたり、エンピツを集めたり、ノートを集めたりと、その分校長というのは学校経営とかそんなことなど殆どないですよ。

**司会** じゃあ、その捕虜收容所にいらつしやるときに真喜屋の校長先生をされて、それから有銘に赴任されたわけですね。

**新里** 有銘とか慶佐次とかいうことは考えない。

島の子供たちをどうするかということであった。学校をつくるうということになって、そして慶佐次のカニクで慶佐次小学校ができた。

**司会** 戦後すぐに、有銘と慶佐次は別々に学校ができたのですか？

**新里** 有銘には適当な人がいなかったもんだから、学校を再建するのも遅かったですよ。

**島袋** 有銘は少なくなくて、新垣善保さんとか、宮城調春さん。佐久本さんは戦死しましたから……。

**新里** 有銘には適当な人がいなかったもんだから、結局遅れた。  
**司会** そうしますと、有銘と慶佐次で戦後別々に学校を造つたようですが、それはどの位続きましたか。

**新里** 半年位だね。有銘小学校を慶佐次に造ろうということだった。だから皆、慶佐次のカニクに造ろうと、有銘に造らなければ慶佐次に造ると。とにかく、有銘に造るのであれば、今の校舎では駄目だから、敷地を広げてくれといった。敷地を広げるのであればいいけど、そうでなければ駄目といって慶佐次のカニクに誘致をしたんだ。そしたら有銘は驚いて大変だった。昔の村（本字）、あそこを全部学校の敷地にしようと、最初予定してあったんですよ。

**司会** 本字の所ですね。

**島袋** 今でも六軒位潰れていますよ。

**新里** 当時、有銘の本字は、全部学校の敷地にしてやったんじゃないかな。

**司会** そうしますと、有銘と慶佐次が別々に小学校を造られたわけですね、当時の慶佐次の先生は何名位で、子供たちの様子はどうでしたか

**新里** 学校の先生も殆ど慶佐次の人でした。有銘にはまだ学生半ばとかで、適当な人がいなかった。

**司会** 別々に運営していた小学校は半年位やって、最終的には合併して元の敷地にまた再建したのですか。

**新里** 半年まで待たなかった。敷地がOKしたから慶佐次には造らなかつた。

**司会** 戦後また一か所にまとまって、再建され新里のおじいさんは戦後の初代校長になるわけですね。

**新里** はい、そうです。そういうことになるね。

**司会** 有銘、慶佐次がまとまって、現在地に学校を再建されたわけですが、当時は大変な苦勞をされたと思いますが、戦後の学校づくり、再建の様子などお聞かせ下さい。

**新里** あの頃の学校は、今の時代には考えられないくらい大変であった。とにかく食糧の確保が先決で、学校で授業どころの騒ぎではない。学校の先生も皆食糧を担ぎにいった。大宜味村に食糧倉庫があつて、缶詰なんかを買ってきた。

**司会** それは、子供たちに上げる分ですか？自分たちの生活の分ですか？

**新里** 村中で分ける物です。有銘は有銘、慶佐次は慶佐次で分けるのだが、学校の先生も有銘の先生だろうが、慶佐次の先生だろうが担ぎに行きました。そんなもんだから、学校の経営なんかということには及ばないね結局、有銘の学校の次は本当ならば慶佐次の方に出来るのだよと最後まで頑張っていたが？

**おばさん** 貴方が転任して一緒に有銘校にきたのは幾つ時か？

**島袋** ここに来たのは、昭和十四年です。

**司会** 先程の写真が丁度昭和十五年の写真のようですね。昭和二十二年の四月に琉球政府に就職し、その後は教鞭とられてないわけです。じゃあ、一番有銘と慶佐次が合併して小学校を造った基礎の部分、苦勞した時のお話しが先の勉強よりも先生方まで動員して食糧を集められたわけですね。

それで、その当時の校舎はどんなにして再建されましたか？

**新里** 校舎は皆焼けて無くなった。掘つ建て小屋の茅葺きです。学校が焼けたのは私の記憶からすると昭和二十年の四月四日ではないかと思つています。なぜかという当時は名護から慶佐次まで歩いて四日かかっていた。私が丁度四月一日に名護を出て、四日に有銘を通過する頃に学校が焼けていたものだから……。

**司会** 焼夷弾が落ちて焼けたのですか。

**島袋** 焼夷弾か曳光弾かどつちかわからないでしょう。

**新里** 学校が焼けたのは、確か四日か五日位ではないかと思つているんだがね。学校はあの時全部焼けてデイゴもあの時に焼けたんだよ。ほんとにみんな焼けた……。

それから学校を造るとなったらデイゴを切つて捨てるわけにはいかないから、自然消滅したわけだなあ。だれが切つたかは知らないが雨、風をしのぐ為に茅葺きを造りました。

**司会** 子供たちも別に教科書もある訳でもないし、字を書くのもないわけですね。

**新里** 字を書くのはセメン紙。(セメント袋を解いたもの)

**司会** その当時は今みたいに運動会とか、そんなものとてもじゃないですね。戦後は着るものはHBTとか、そういうったものが少しあったと思いますが。

**新里** アメリカの洋服を原料にしてつくつたんですよ

**島袋** 配給があつたからね？

**新里健** 僕も覚えているけど、セメン紙を四角に切つて、この大きさに切つて作つて、それが元だったよ。机、腰掛けもないか

らソーメン箱を持つてきて、人は石に座つて勉強しました。

**司会** その頃まではまだ学校の農場などは、作れる状況ではなかったわけですね。その後、落ちついてからですね。

**新里** 新里のおじいさんもおっしゃっていました。敷地を拡張したけれども、敷地など耕す気力もないわけです。地ならししないから運動場も荒れ放題になっていた。

**司会** 学校の様子と少し変わりますけど、有銘で教鞭を執られたのは、その前の昭和十四年からですか？

**新里** いや十年からです。

**司会** 新里のおじいさんはとつてもスポーツマンで沖縄県を代表して、今でいう国体選手として活躍されたとお聞きしましたが、その辺のエピソードなりをお聞かせ下さい。

**新里** どうしてあんなになつたか、自分でもわからない。

**おばさん** 終戦後も、そういう方面へ行きなさいと、県も勧めていたけど、事業を失敗した後だったので断念した。

**司会** 代表で行かれた時の種目は何でしたか？

**新里** 私は、初めは砲丸投げからやりだして、仕上げはBM、二百Mとリレーの選手ですよ。BM、二百Mで競技生活は終わつたわけだよ。

**新里健** 伊江島の飛魚小(早い人)がいたでしょう？渡久地と二人で国頭を代表して行った……。

**新里** 目が良ければ見て懐かしかった筈だが？

**司会** 島袋徳盛先生、ひととおりのお話を伺いましたので今度は写真を見ながら、思い出話しを自由にお願ひしましょう。

**司会** この前、有銘小学校創立百周年「座談会」を行いました。その時に戦後の一時期、有銘と慶佐次に小学校が出来ていたというのを、又吉慶典さんが少し触れていました。他の人は皆、あまり記憶に残っていないようでした。

**島袋** 校舎はないし、ただ露天であった。慶佐次はカニクの新しい村営住宅のある浜あたりだった。あまり印象にないでしょうね。

**司会** それで、その名残りで戦後そこに幼稚園があつて、ミヨおばさん？が先生をしていたんですね。

**島袋** 最初は有銘の校舎の方もテントを貰つてきて、それを張っていた。それから茅葺き屋になった。テントは雨が打ち込んだりするでしょう、開けたら又濡れたりした。

**おばさん** あんたはどここの学校に居た。

**島袋** 私は有銘でしたよ。招集されて南部にいたんだが、名護の試験場でお茶を摘んでこいと言われて、小禄から山づたいに山原へ来て、そのまま戻れなくなり、終戦を迎えました。

**司会** お茶を摘みにこなければ、もっと苦労していたかも知れないですね。

**島袋** 戦地に残って帰って来た人は慶佐次では一人もいないのでは？教員も皆そうです。教頭は与那原、慶佐次からは私一人だけでした。

**司会** 明治の頃、学校へ就学すべき年に学校へ通えない子供たちに、学校側から親に何か督促みたいなことはありましたか。

**新里** 教育の義務というのがあるでしょう。それによって学校に就学しなくちゃならんものだから、親の方に皆就学させな



戦前陸上選手で活躍した当時の写真（写真提供：新里義雄）



いと言っていたようです。

**島袋** 慶佐次は未就学児は少なかったですよ。

**新里** ほとんど、クワームヤー（子守）をしていた。

**島袋** 私の同級生では、子守しながら学校へ通っていた。

**司会** 一年就学しては、又一年休むとか、年齢は相当隔たりもあるけど、一緒に卒業したのも居たでしょうね。

**新里** 八歳から就学した人も居るし、九歳からの人もいるし実際に十歳から就学した人もいますから。

**島袋** 学事奨励というのは、そこから来たのではないかなー学校に皆就学させなさいと言つて。学事奨励会で怒られたりはしただけど、結局、長欠児童をなくす方法ではなかったか？

**司会** 子供たちは学校に通わせなさいと言つて、そのかわり少しはお金を貸しますよとか、そういう制度もありましたか？

**新里** 昔はお金ではなく、エンピツとか帳面をくれた。

**島袋** お金はずつと後からで、五十セントくらいから始まった。中学に入学したら一円だったかな？しかし、今の貨幣の価値に直すと一萬円の値打ちがあつたのでは。殆どエンピツ、紙、学用品でした。

**新里** 学事奨励会の行事は悪虫払いのときに行つていたが学校の先生方も皆参加していた。慶佐次は慶佐次で全部、有銘は有銘で全部参加していた。

**島袋** 慶佐次の学生が行かないと……の学生会が開けなかつたという。

**新里** 旧久志村の時代はね。各中学校に学生会というのがあつ

て、一中、二中、三中の各学校、また女学校に慶佐次の生徒が行かないと会が開けないだよ。だから全村一致して行つていた。一戸半から二戸位の間で一人くらい居た。

昔から慶佐次は教育に熱心だったと思う。というのも間切時代に慶佐次から沢山の役場吏員がいた。役場吏員というのは、その字の指導者が勤めていたと思う。

**司会** 久志間切の村長は外語のおじいさん（宮城……）

**島袋** 間切長・村長。

**司会** 吉本のおじいさんは助役もなさっていましたか？

**新里** 助役ではなくて、すぐに村長になったと思う。有銘の学校から村に吉本チョウセイといつてね、旧久志村の間切長、村長は皆、慶佐次から出ていた。

**司会** うちの親も瀬嵩の高等科に行つていたという。道のない時代ですから食糧を担いで学校に通つたとか？

**新里** 君のお父さんは一年位、久志に通つているよ。高等一年は久志村に通つて、高等二年は有銘に通つたはず。

**島袋** 高等科ができたのは東校より早いらしいね。

**司会** 有銘は大正八年に高等科が設置されていますから。天銘の頃ですわね。

**島袋** 宮城の人でも慶佐次から有銘の高等科に通つた人もいる。

**司会** 明治時代に子供たちが勉強している風景といたら、今みたいに男も女も席を同じくして勉強していたんですか

**新里** いや、女は女、男は男同士でしたよ。

**司会** 同じ教室を使つていたのですか。





戦前の沖縄県立第一高等女学校（写真提供：翁長ナハ）

新里 同じ教室で女の列、男の列があった。先生おはようと言ってから「先生おはよう、皆さんおはよう、きょうも楽しくお稽古しましょう」と歌を歌ってから始まった。

司会 これが、毎日繰り返しですから体で覚えていらっしゃるわけですね、

司会 それと慶佐次の橋が出来ない前はどういうふうの有銘の学校に通っていましたか？満潮のときは船ですか？橋の出来ない前は学校に通う状況など、例えば船で渡るとしても、大雨が降ったら学校に行けないという状況だったんでしょね？

新里 船は殆ど出さなかったよ……

島袋 親たちが船で対岸まで渡してもらったが、普段は自分で渡って、船はそのまま置いていた。冬はきつかったね、寒くて、水の中裸足で渡るわけでしょう。

司会 慶佐次の橋が出来たのは昭和十三年か（昭和八年）それまで橋がないわけですから、川を渡らなければ行けないわけですね。

島袋 だから、あの頃は竹馬に乗って渡った。途中で転んだりしたら、ずぶ濡れになり家に帰って着替えていったこともある。あの頃は今考えたら山道を殆ど走って行きましたね。コーヒー園のところを通ってね。干潮の時は歩いて、満潮の時は船でそこに広い砂浜があつてね。そこで、ボール蹴りをしたり、野球もするし、運動場代わりでしたね。

司会 本日は新里義雄さんには大変長時間にわたって、天銘小学校の話しや、戦前、戦後の有銘、慶佐次の様々なことについてお話をいただき大変有意義でした。ありがとうございました。